

伊那市手良地区県営ほ場整備事業

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

# 鍛治垣外遺跡

1989. 3

上伊那地方事務所  
伊那市教育委員会

伊那市手良地区県営ほ場整備事業

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

# 鍛治垣外遺跡

1989. 3

上伊那地方事務所  
伊那市教育委員会



# 序

この報告書は、手良地区の県営は場整備事業により緊急発掘調査した報告書であります。

手良地区におけるは場整備事業は、昭和52年度に中坪地区で着手されました。手良地区での土地改良事業に伴う発掘調査は砂場遺跡、上村遺跡、堤林遺跡、島崎遺跡等の数多くの遺跡で行われております。

土地改良事業、開発事業等と文化財保護との関係は大変むずかしい問題ではあります  
が、先人が遺した貴重な人類の足跡は私たちが後世に伝えていかなければなりません。

この遺跡においては、奈良、平安期のものが中心的であり、住居址6軒と堀2軒、竪穴、溝状遺構等が発見されました。また、遺物の中には縄文、弥生時代のものもみられ、  
永い時代を感じさせております。

この発掘調査におきましては、県教育委員会ならびに上伊那地方事務所土地改良課職員の方々のご指導をいただき、調査団長の友野良一先生をはじめ調査員の先生方、また地元の方々の積極的なご協力、作業員のみなさんのご努力により、ここに無事報告書を刊行するはこびとなりました。深く感謝申し上げるとともに、この報告書が今後教育文化の向上に活用されることを願っております。

伊那市教育委員会

教育長 宮下 安人

## 例　　言

1. 本書は昭和63年度に実施した、伊那市手良地区県営ほ場整備事業に伴う、緊急発掘調査の報告書である。
2. この緊急発掘調査は、上伊那地方事務所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本報告書は、昭和63年度中にまとめることが要求されているため、調査によって発見された遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、資料の再検討は後日にゆすることにした。
4. 本報告書の執筆者及び図版製作者は次のとおりである。
  - 本文執筆者　友野良一・小木曾清・寺平宏・矢島太郎・早川宏
  - 図版製作者　友野良一・小木曾清・早川宏
  - 写真撮影　　友野良一・木下平八郎
5. 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会がおこなった。
6. 遺物及び実測図類は伊那市考古資料館に保管してある。

# 目 次

口 紋

序

例 言

目 次

挿図目次

表目次

図版目次

|                  |    |
|------------------|----|
| 第Ⅰ章 発掘調査の経緯      | 1  |
| 第1節 発掘調査に至るまでの経過 | 1  |
| 第2節 調査会の組織       | 1  |
| 第3節 発掘調査の経過      | 2  |
| 第Ⅱ章 遺跡の環境        | 3  |
| 第1節 遺跡の位置        | 3  |
| 第2節 地形及び周辺の遺跡分布  | 4  |
| 第3節 手良地区の地質      | 5  |
| 第4節 歴史的環境        | 7  |
| 第Ⅲ章 遺構と遺物        | 11 |
| 第1節 調査の概要        | 11 |
| 第2節 遺構と遺物        | 11 |
| 所 見              | 33 |
| あとがき             | 34 |
| 参考文献             | 34 |
| 図 版              | 35 |

## 挿図目次

|       |                    |    |
|-------|--------------------|----|
| 第1図   | 鍛治垣外遺跡の位置図         | 3  |
| 第2図   | 鍛治垣外遺跡周辺の地形及び遺跡分布図 | 4  |
| 第3図   | 手良地区地質概界図          | 5  |
| 第4図   | 鍛治垣外遺跡地質柱状図        | 5  |
| 第4図-2 | 鍛治垣外遺跡地質柱状図        | 5  |
| 第5図   | 鍛治垣外遺跡周辺地字名図       | 8  |
| 第6図   | 鍛治垣外遺跡遺構配置図        | 9  |
| 第7図   | 第1号住居址遺物実測図        | 12 |
| 第8図   | 第2号住居址実測図          | 13 |
| 第9図   | 第2号住居址遺物分布図・接合関係図  | 14 |
| 第10図  | 第2号住居址遺物実測図        | 15 |
| 第11図  | 第2号住居址出土土器拓影       | 16 |
| 第12図  | 第3号住居址実測図          | 17 |
| 第13図  | 第3号住居址遺物分布図        | 18 |
| 第14図  | 第3号住居址遺物実測図        | 19 |
| 第15図  | 第4号住居址実測図及び遺物分布図   | 20 |
| 第16図  | 第4号住居址土師器出土状況配置図   | 21 |
| 第17図  | 第4号住居址出土土器実測図      | 22 |
| 第18図  | 第5号住居址実測図          | 23 |
| 第19図  | 第6号住居址実測図          | 24 |
| 第20図  | 堀1号実測図             | 25 |
| 第21図  | 鍛治垣外遺跡B地区実測図       | 27 |
| 第22図  | 堀1、2号その他出土遺物       | 28 |
| 第23図  | G-9グリッド出土土器実測図     | 30 |
| 第24図  | 堀2号実測図             | 31 |

## 表目次

|     |                 |    |
|-----|-----------------|----|
| 第1表 | 第2号住居址遺物一覧表     | 14 |
| 第2表 | 第3号住居址遺物一覧表     | 19 |
| 第3表 | 第4号住居址ピット規模別一覧表 | 20 |
| 第4表 | 第4号住居址出土土器一覧表   | 21 |

## 図版目次

### カラー図版

|       |                         |    |
|-------|-------------------------|----|
| 図版 1  | 遺跡近景                    | 37 |
| 図版 2  | 地質調査グリット断面              | 38 |
| 図版 3  | 第 1 号住居址出土土器            | 39 |
| 図版 4  | 第 2 号住居址、遺物出土状態         | 40 |
| 図版 5  | 第 2 号住居址出土土器            | 41 |
| 図版 6  | 第 2 号住居址出土遺物            | 42 |
| 図版 7  | 第 3 号、4 号住居址            | 43 |
| 図版 8  | 第 3 号住居址出土遺物            | 44 |
| 図版 9  | 第 4 号住居址遺物出土状態          | 45 |
| 図版 10 | 第 4 号住居址出土遺物            | 46 |
| 図版 11 | 第 5 号、6 号住居址            | 47 |
| 図版 12 | 第 5 号、6 号住居址出土遺物        | 48 |
| 図版 13 | 堀 1 号                   | 49 |
| 図版 14 | 溝状遺構、貯水池                | 50 |
| 図版 15 | 堀 2 号                   | 51 |
| 図版 16 | 堀 2 号出土遺物 W-13 グリット出土遺物 | 52 |
| 図版 17 | 堀 2 号出土遺物               | 53 |
| 図版 18 | 歴史的環境                   | 54 |
| 図版 19 | 遺跡遠景                    | 55 |
| 図版 20 | 発掘スナップ                  | 56 |

## 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

### 第1節 発掘調査に至るまでの経過

昭和63年度手良地区県営は揚整備事業地区内の遺跡調査を委託された場合には、受託するよう県教育委員会より市教育委員会に連絡があり、上伊那地方事務所より緊急発掘調査について委託したい旨、市教育委員会へ依頼があった。市教育委員会では、鐵治垣外遺跡調査団を編成し、業務を遂行することになった。

昭和63年6月13日上伊那地方事務所長と伊那市長との間で、調査委託業務の契約を締結。

昭和63年6月17日埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁へ提出。

### 第2節 調査会の組織

#### ○伊那市教育委員会

教育委員長 山口 豊  
委員長代理 金原信郎  
委 員 赤羽芳雄  
# 下平繁

教 育 長 宮下安人

教 育 次 長 三沢貞一

#### ○鐵治垣外遺跡調査団

團長 友野良一 (日本考古学協会会員)  
調査員 小木曾清 (宮田村)  
御子柴泰正 (長野県考古学会員)  
寺平宏 (四紀学会員)  
調査補助員 矢島太郎 (伊那市文化財審議委員)  
織井与衛務 (伊那市文化財審議委員)

### 第3節 発掘調査の経過

- | 月日    | 日誌   |
|-------|--|
| 7. 12 | 午前中発掘器材を伊那市考古資料館より現場へ運び、テントを設営した。調査団会を開き、調査について討議した。                                   |
| 7. 13 | グリッド設定。U-7~10, V-7~11グリッド調査し、土器が出土。  |
| 14    | 0-11~26グリッド調査。0-25グリッド地点において住居址を発見。2号住居址とする。   |
| 16    | 0-25グリッドを中心として2号住居址を掘り下げる。0-15~19グリッドの断面実測及び写真撮影をする。                                   |
| 18    | 0-19~24グリッドの断面実測及び写真撮影。  |
| 19    | G-8, 9, H-7, 8, 9, I-7, 8, 9グリッド調査をする。G-9グリッド地点に住居址を発見。3号住居址とする。F-8グリッド西側に堀を発見し堀1号とする。 |
| 21    | 3号住居址の掘り下げ。テント北側の水田地帯において重機により耕土はぎをする。木柵を発見する。   |
| 22    | 2号住居址のカマド調査、断面実測をする。   |
| 23    | 2号住居址の平板実測、カマド実測、遺物取り上げ  |
| 24    | 遺跡説明会、2号住居址、3号住居址、堀1号について説明会を開く。小雨が降るにもかかわらず、80名程の方々の参加があった。                           |
| 25    | 3号住居址を掘り下げる。   |
| 26    | 堀1号の掘り下げ。H-8グリッドに住居址発見。4号住居址とし重機により拡張して調査した。F-11グリッドにより堀及び住居址を発見。5号住居址とする。             |
| 27    | 3号住居址実測遺物取り上げ。4号住居址実測。F-11グリッド付近より東側へ重機により耕土削除し、堀2号、5、6号住居址を掘り下げる。                     |
| 29    | 堀2号、5、6号住居址掘り下げ、写真撮影。  |
| 30    | 遺跡全測図作製。現場のあとかたづけ。   |
| 9.    | 出土遺物整理作業   |
| 3.    | 報告書刊行  |

発掘調査に参加された方々（順不同）

池上大二、伊藤 勝、伊藤菊次、蟹沢治江、大野田英、埋橋程三、上島正延、登内かず江、酒井とし子、大久保富美子、大野田三千代、寺平 宏、木下平八郎

発掘にあたりご協力いただいた地元の方々、直接参加された方々に厚く感謝申し上げます。

## 第II章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の位置

鍛治垣外遺跡は、長野県伊那市手良沢岡・野口地籍にある。遺跡に至るには、JR線伊那北駅より、天竜川を渡り、主要地方道伊那辰野線（通称辰東線）を辰野方面へ約6km進み卯の木交差点を右折し、県道美篠箕輪線に入る。この道を東へ向かい約3km進むと手良地区下手良に至り、伊那市役所手良支所、手良郵便局、手良小学校が棟をならべている。伊那市役所手良支所の北東側一帯の水田地帯に鍛治垣外遺跡が存在する。

手良地区は伊那市の東部に位置し、東に連なる山は高遠町と接し、北は箕輪町と接している。本遺跡の周辺には、縄文中期の東松遺跡、中世の堤林遺跡、近世の上村遺跡等の存在が確認されていて、本遺跡のはば中央を天竜川に向かって瀬沢川が流れている。



第1図 鍛治垣外遺跡の位置図

## 第2節 地形及び周辺の遺跡分布

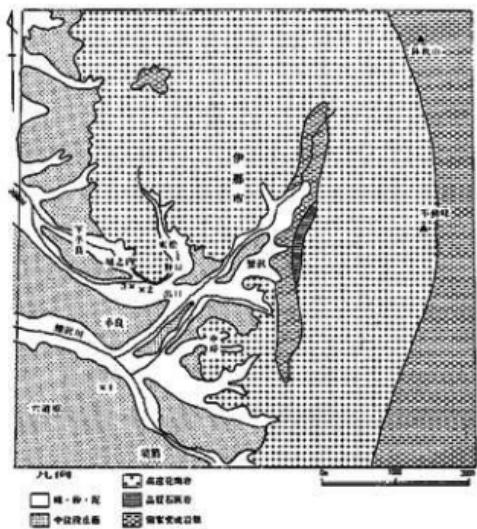


第2図 鍛治垣外遺跡周辺の地形及び遺跡分布図

1) 地形 遺跡の位置する手良地域は、東に鉢伏山（1456m）・不動峰（1374m）が連なる西に展開する三峰川によって形成された台地である。この台地と棚沢川や沢岡川それに合流する小河川の再浸食して出来た複雑な段丘地形をつくっている地域である。

- |         |          |         |          |         |         |
|---------|----------|---------|----------|---------|---------|
| 1. 鍛治垣外 | 7. 鳥ノ宮   | 13. 孤垣外 | 19. 鳴神   | 25. 宮の平 | 31. 二十平 |
| 2. 古八幡  | 8. 野口畠   | 14. 金山  | 20. 竜の沢  | 26. 砂場  |         |
| 3. 堂垣外  | 9. 東松    | 15. 山伏塚 | 21. 大百済毛 | 27. 石見堂 |         |
| 4. 野口   | 10. 大上   | 16. 丸山  | 22. 城山   | 28. 中原  |         |
| 5. 矢塚   | 11. 入林   | 17. 浜弓場 | 23. 上村   | 29. 地神原 |         |
| 6. 辻垣外  | 12. ワランベ | 18. 近洞  | 24. 社宮地  | 30. 小荻原 |         |

### 第3節 手良地区の地質



### 第3回 手奥地区地質概界図

| 地質図   | 種                | 名    | 分類  | 生     |              | 地質    | 地名  |
|-------|------------------|------|-----|-------|--------------|-------|-----|
|       |                  |      |     | 成     | 性            |       |     |
| 10-1  | 高色土              | 田色土1 | 105 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
|       |                  |      | 106 | b1>rm | (ag, hp)     | gr>T1 | -   |
|       | 灰褐色土             |      | 107 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
|       |                  |      | 108 | b1>rm | (ag, hp)     | gr>T1 | -   |
|       | 黑色土              | 田色土2 | 109 | b1>rm | (ag, hp, 25) | fl>T1 | br. |
|       |                  |      | 110 | b1>rm | (ag, hp)     | gr>T1 | -   |
|       | 麻疹土              |      | 111 | b1>   | (ag)         | gr>T1 | -   |
|       |                  |      | 112 | b1>   | (ag)         | gr>T1 | -   |
|       | 灰色 土             |      | 113 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
|       | 田色土が非常に多い        |      | 114 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
| 100-1 |                  |      | 115 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
|       | 黑色土 (Pb混入)       | 田色土3 | 116 | b1>rm | (ag)         | fl>T1 | -   |
|       |                  |      | 117 | b1>rm | (ag)         | fl>T1 | -   |
|       | 灰色 土 風化          |      | 118 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
|       | 角張った 0.2~1.0cm四方 |      | 119 | b1>rm | (hp)         | gr>T1 | -   |
|       | 粘 土 黑色土          |      | 120 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
|       | 麻疹土              | 田色土4 | 121 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
| 150-1 |                  |      | 122 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
|       | 灰色 土 風化          |      | 123 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
|       | 角張った 0.2~1.0cm四方 |      | 124 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
|       | 粘 土 黑色土          |      | 125 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
|       | 麻疹土              | 田色土5 | 126 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
| 200-1 |                  |      | 127 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
|       | 灰色 土 風化          |      | 128 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
|       | 角張った 0.2~1.0cm四方 |      | 129 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
|       | 粘 土 黑色土          |      | 130 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
|       | 麻疹土              | 田色土6 | 131 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
| 250-1 |                  |      | 132 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |
|       | 灰色 土 風化          |      | 133 | b1>rm | (ag)         | gr>T1 | -   |

黒土 鬼界アカホヤ火山灰を含む  
褐色大山灰、ソフト柏原Tの大山灰を含む

赤色スコリア(径2~3mm)点在  
褐色火山板。ハーフ

赤色スコリア(径2-3mm)点在  
軽石(径3-10mm)混在  
灰褐色火山灰、非常にハーブ

赤色スコリア点在  
褐色火山灰、ややハード

赤褐色スコリア (15-20mm) 開金鉱石 Pm-N

黒褐色大山灰、非常にハード、赤色スコリア混在

#### 褐色火山灰(砂質)。軸石溫在

黄-棕色砾石 (径1-3mm)、卵圆砾石 Pm-1  
らくだ色大山灰

橙色砾石 (径2~6mm), 脚骨砾石 P m - II'

らくだ色火山灰、粗石混在  
黄一褐色粗石（径2-6mm）、脚底砾石Pm-II  
灰褐色～黑色火山灰〔砂質〕

黃色—白色砾石 (徑10-50mm)  
黃色砾石 Pm-1

卷之三

灰褐色至一秒

深褐色兒一秒

總 感

第4図 鎧治垣外遺跡地質柱状図(図3の×1地点)

第4图-2 霍治堰外遭跡地質柱狀圖（第3圖×2點）

## 1. 手良地域周辺の地質

手良地域は六道原扇状地の三峰川麓部に位置する。東側の山地は領家帯の高遠花崗岩よりなり、鉢伏山と不動峰を結ぶ伊那市と高遠の分水嶺から高遠寄りは領家変成岩となる。また、この変成岩類は蟹沢の東方にも高遠花崗岩に囲まれて南北に細長く分布している（図3）。この地域に分布する領家変成岩類は、古生代及び中世代に海底に堆積した砂や泥を主とする堆積物が、広域変成作用を受けて雲母片岩や黒雲母片麻岩に変わったものである。また、これらの変成岩は中世代末から新生代古第三紀にかけて貫入した高遠花崗岩によって接触変成作用を受け、花崗岩の周辺部では黄青石ホルンフェルスなどを含む接触変成帶を形成している。

## 2. 手良地域の段丘

この地域は三峰川によって形成された六道原扇状と棚沢川などの小河川によって形成された扇状地の接点にあり、更にその扇状地を棚沢川や沢岡川が再浸食して複雑な段丘地形を作っている。1987年に図3の×1地点で大春化學㈱により白土探査のための穴が掘られた。この側壁の観察結果を柱状図に表したもののが図4である。この地点では六道原扇状地の礫層の上に約8万年前に降下し堆積した御岳軽石層のPm-1がのり、更にその上位にはそれ以後に降下した軽石や火山灰を乗せている（図4-1）。したがってこの面が形成され段丘化した年代はPm-1の軽石が降下した8万年前よりも以前のおよそ10万年前頃である。図3の中位段丘面とした面は恐らくこの時代か或はやや後に離水して段丘化したものと思われる。

## 3. 錬治垣外の地質

錬治垣外の図3×3地点で掘られた土木工事の溝での観察結果によれば、この面には×1地点に見られたような軽石や火山灰の層ではなく、礫層の上には厚さ約1.5mの砂層が3.5mの深さまで観察され、構成する礫の種類は砂岩や粘板岩、緑色岩を主とする5-20cmの亜円礫で、風化がかなり進んでいる。これらの礫は東側の山地に分布する領家帯の岩石ではなく、中央構造線よりもさらに東側の三波川帯や秩父帯、四十万帯から運ばれてきたものであり三峰川の扇状地礫層と考えられる。つまり、この付近まで時には三峰川が流れて扇状地礫層を堆積し、×1地点と同じように離水後に8万年前に降下した御岳軽石を乗せていたが、それ以後の棚沢川や沢岡川の浸食作用によって削り取られてしまったものと思われる。

図4-2は図3×2地点の柱状図である。砂層は×3地点よりも厚く2.5mを越える。この砂層を構成する砂粒は黒雲母や白雲母、石英、長石の他に少量の磁鐵鉱、しそ輝石、ジルコンなどが混じる。これらの鉱物は火山起源のものでなく、東方山地の領家帯の岩石に含まれる鉱物であり、主として沢岡川の上流の東松方面か、或は蟹沢の方面から流水によって運ばれて堆積したものと考えられる。砂層の下部から上部にかけて始良Tn火山灰（九州鹿児島湾の始良カルデラから約2万年前に飛来した火山灰、略称AT）の火山ガラスと形態が一致するバブルウオール型（電球の破片のようなガラス片）の火山ガラスがわずかに含まれている。しかし、ガラスの含まれる量がごく僅かで

あることから、おそらく二次的に移動してきて混じったものであろう。

この砂層の断面におよそ5層の黒色帯が見られる。これらは堆積の休止期に植物が繁茂し、それらの遺体が砂粒に混入したものである。したがって、この面は洪水によって土砂が堆積し、しばらく休止期間をおいてまたその上に堆積するということを何回か繰り返して現在に至ったものであろう。しかし、その年代を決定するような火山灰資料がないために、地層の各層準の細かな年代を推定することはできないものの、ATの再堆積したガラスが混入しているからこの地層の堆積年代はATが降下した約2万年前よりも以後である。(寺平)

#### 第4節 歴史的環境

本遺跡の周辺には、角城(下手良)平安時代、辻西幡(下手良)平安時代、南垣外(下手良)平安時代、松太郎久保(下手良)绳文早期、中期、平安時代、丸山(中坪)绳文中期、中世、館跡、垣外(下手良)绳文中期、東松(野口)绳文中期、弥生前期中期等の関連遺跡がある。

手良に残る城館址「野口館城」空堀が残っている。「城山」(中坪)の城郭には空堀と土塁が残り焼米や内耳が発見されている。「丸山の城」(中坪)空堀と土塁。「内城」(下手良)空堀「浅間社城」(下手良)空堀が残っている。「春日城」東松の西に当たる海拔850mの山頂にある山城で、北側に高い土塁がめぐっている小郭である。郭の北の尾根に堀切の空堀と小郭が設けられている。また、南傾斜面に何段かの帶郭が認められる。これらの連郭式城は後方に結の城を持つ戦国時代よく作られる城の形式に類似している。伊那市史には春日氏の城とされている。これら現在に残っている城館址は中世中頃以後のものと考えられるもので、古代末中世初頭と言われるものは明らかでない。

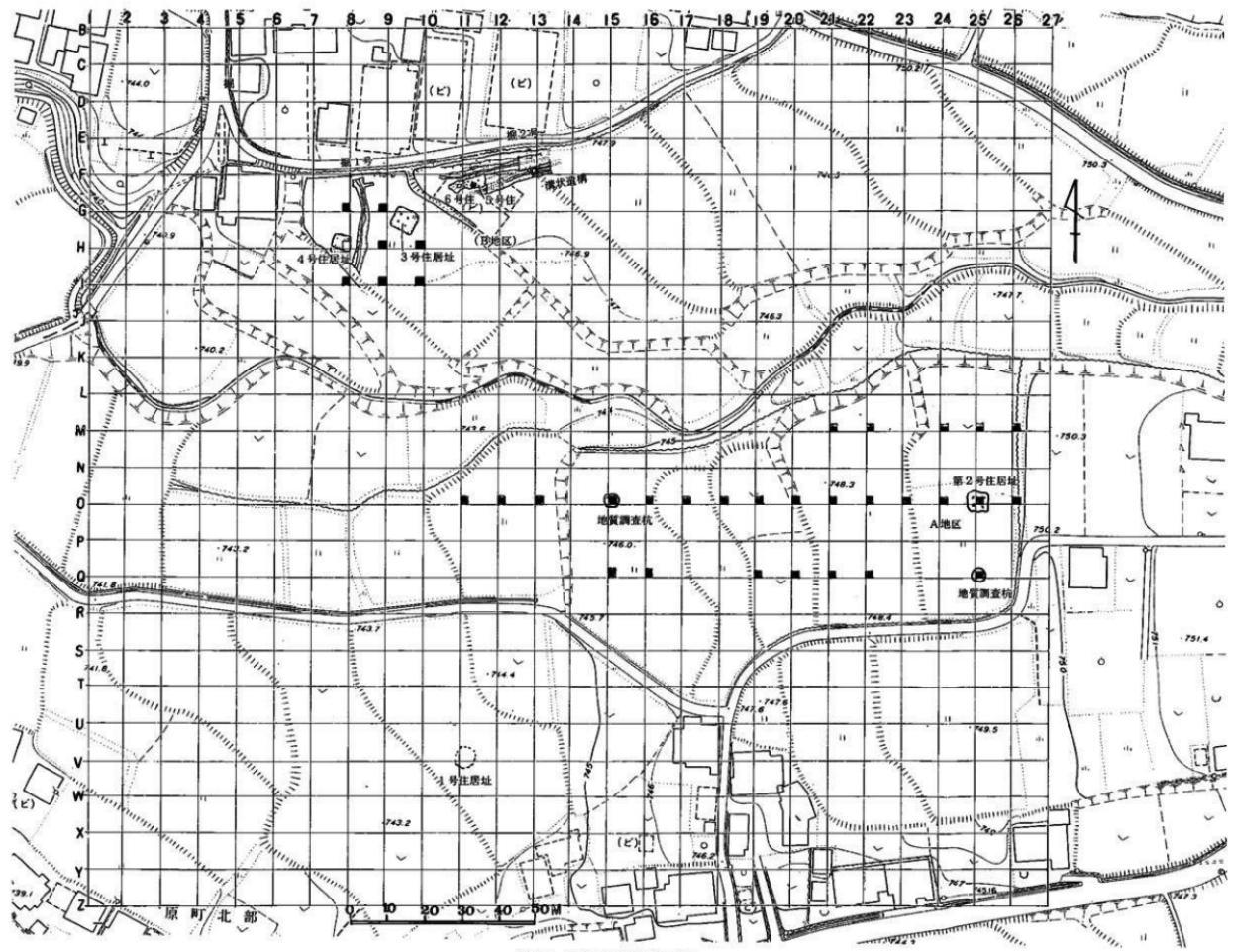
地字 鎌治垣外遺跡付近に残る地字を拾ってみると、鎌治垣外は遺跡名になっているが、これは、字の示すとおり鎌治場が付近にあった名残である。この遺跡の付近には何々垣外と言う地名が多く集中している場所である。南垣外、千子垣外(遺跡付近)、中垣外、は旧街道に添っている地籍で、町割風であるあたり、この近くに古い居館が存在しそうである。そのほか八幡山堂垣外、向垣外など、垣外と言う地名がある。それ以外に中村、馬場、畠、原田、堀、城軒屋敷など古代から中世に使われた地字が残っている。

薬師堂 薬師信仰は平安時代後期から鎌倉時代前期にかけて当地方に入ってきた信仰である。近くに笠原薬師暦応3年の銘がある仏像がある。また、野口には薬師ではない阿弥陀如来であるが鎌倉期の像が存在する。堀之内の薬師は材は檜一本彫の尊像で、総長34cm、螺髪の低い彫出法方は鎌倉期によく見られるところである。時期は室町時代と考えられる。

堀、と言う地字は「城」と言う郭名の出て来る古い地字で、おそらく、平安末期中世初期の館を思わしめる地字である。(矢島)



第5図 鋼治場外遺跡周辺地名図



第6図 原町北部 外縁道路構成配置図



## 第III章 遺構と遺物

### 第1節 調査の概要

鍛治垣外遺跡の発掘は、南信土地改良事務所及び関係諸府の補助による委託事業である。本調査は予算的措置等により、63年中に報告書の刊行が必要のため、実測図及び図版を主にし遺物の分類は後日にゆずることとした。

調査は、重機により表土を除いた後、鍛造がけで層を削り取り、遺構の存在が確認された後、発掘を行った。

調査の結果、A地区からは第1号住居址奈良時代末、第2号住居址平安時代初頭の住居址と、地質の調査をすることができた。B地区からは第3号、第4号、第5号、第6号の平安時代の住居址、堀1号、堀2号、中世初頭と考えられる堀と溝状遺構を調査することができた。

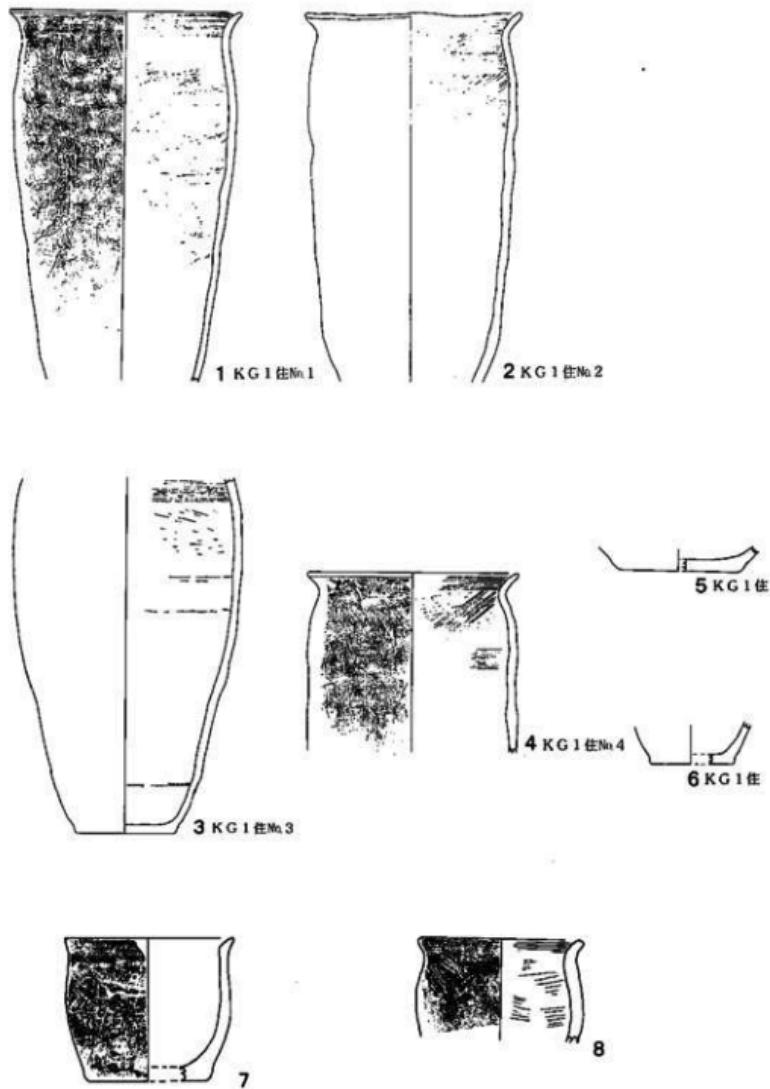
### 第2節 遺構と遺物

#### 第1号住居址

本住居址は、水田造成工事中V11区に発見された住居址である。この場所は計画水田面が現況面よりかなり低いように設計されているので、工事用の重機が住居址の床面近くまで掘り下げた時点で発見されたので、壁は完全に破壊された状態である。遺物の発見された付近には焼土や焼石が出土したので、住居址の「カマド」であった可能性が強い。こうした現状からは住居址のプランはつかめなかつたが、焼土や焼石・床面の一部残存状態から、鍛治垣外1号住居址とした。(友野)

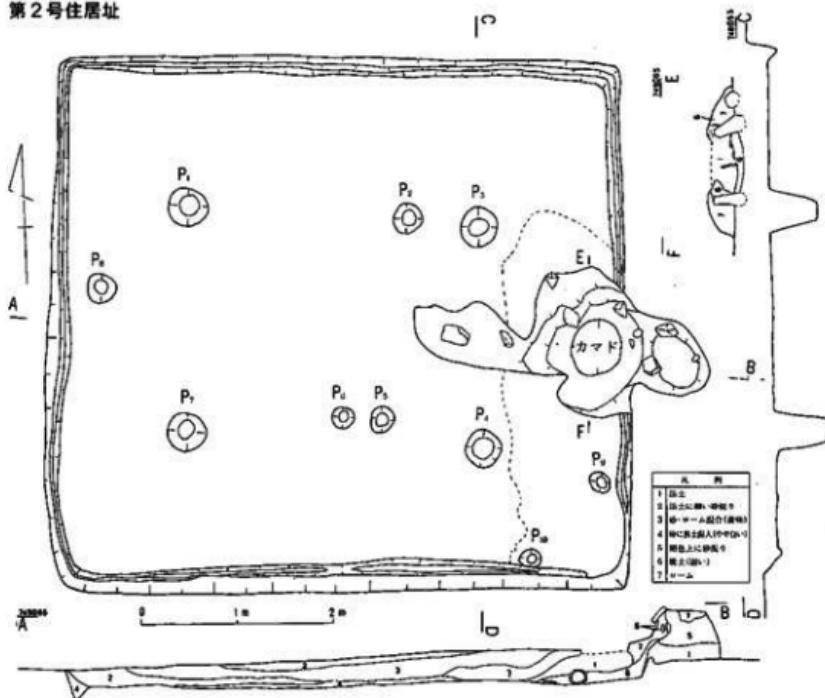
#### 遺物（第7図、図版3）

1は口径23.5cm、カメ形土器。器面箝削のあと浅いカキ目状の調整痕がみえる。2は口径21.5cm、器は荒い箝削痕が目立つ。器内面は横ナデ。3は口縁を欠くカメ形土器。4は1と同様のカメ形土器。5はロクロ目の残った底部。6は底部。7は土師の小カメ。8は土師小形カメ。時代は城の内IV～V期頃と考えられる。



第7図 第1号住居址遺物実測図

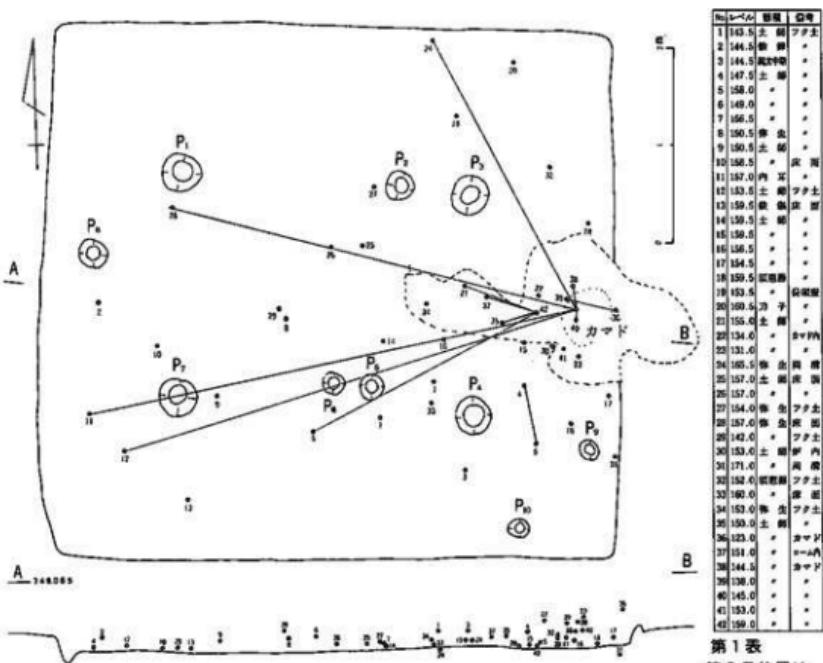
第2号住居址



第8図 第2号住居址実測図

遺構（第8図、第2表、図版4）

本址は、試験掘りの際、グリッド0-25地点に住居址のカマドと思われる遺構が発見され、これをグリッドP-25、N-24、P-24へ拡張し、表土から約1.2m下層の砂地層に発見された竪穴式住居址である。本址の推定出来る規模は、東西約6m、南北約5.5mを測るほぼ方形を有するものと思われる。主軸の方位はEを示す。壁は、北側及び東側が比較的高く残存し、壁高は27cm~15cm前後で、南及び西側の壁高は、高い所で19cm、低い所で10cmを測り、壁は何れも砂地の為、しまってはいるが、もろくなっている。床面は、砂地の上に貼床されたものと思われるが、一部カマドの周辺から南東の隅に設けられた入口までは貼床が残存し固いタタキになっていただけで、恐らく洪水等により洗い流されたものと考えられるが砂地だけの床面としては、比較的表面だけは固く平らになっていた。ピットは、1~10まで検出され、主柱穴は、P1、P3、P4、P7が考えられる。径40cmの円形で深さ54~45cm、底は平らで固い。P2、P5、P6は間柱のものと思われ、径24~30cm、深さ13cm前後である。P8は母屋柱に当たる柱穴であろうか、径30cm、深さ23cm、底は平らである。P9、P10は入口に設けられた柱穴であると思われる。径20cm前後、深さ30cm前後である。周溝は、入口を除いては全体に検出され、南側及び南西部が浅く約4~3cmで、その他は10cm前後である。



第1表  
第2号住居址  
出土遺物一覧表

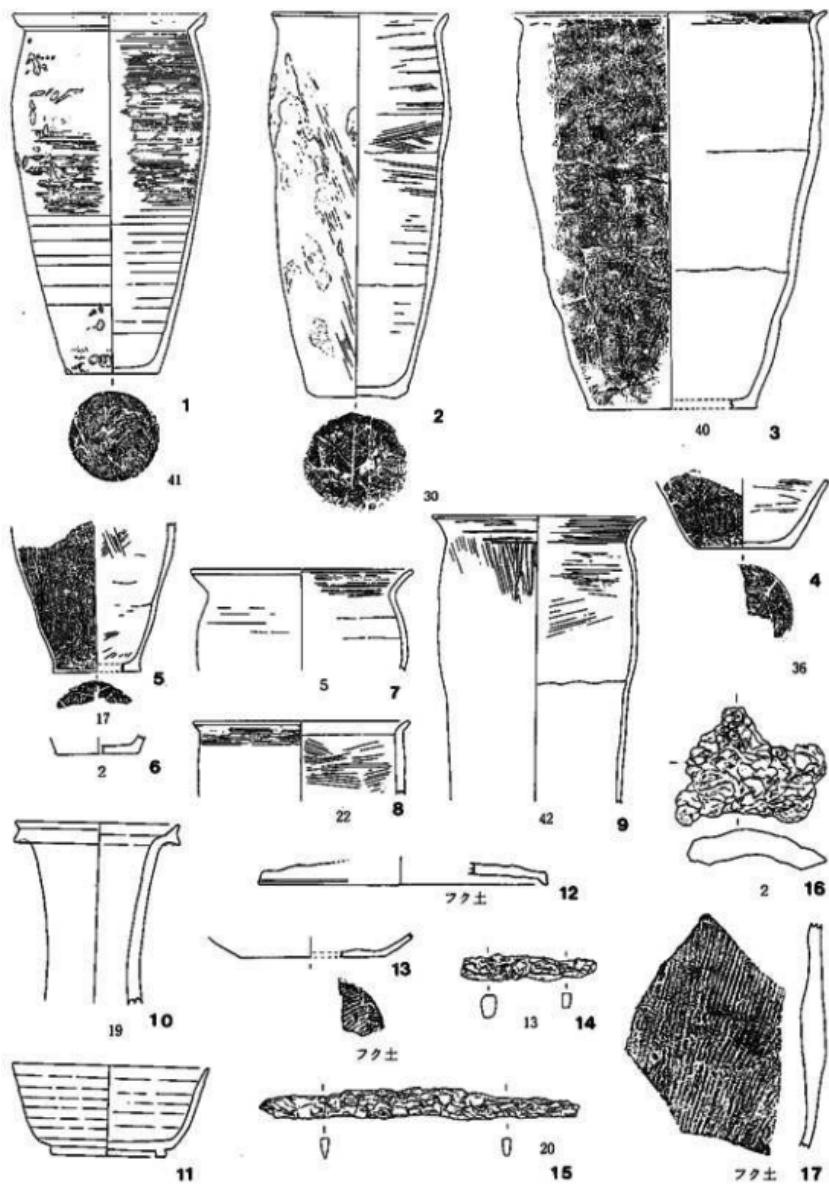
第9図 第2号住居址遺物分布図、接合関係図

カマドは、東側ほぼ中央に築かれた石芯粘土カマドで上部は崩れ落ち、カマドを造った粘土が床面上に約1.5m程流出している。カマドの入口及び内部には、殆ど完形に近い土師器カメ2ヶと破片が検出された。カマド内の土器片は同一箇所のものである。(小木曾)

#### 遺物 (第10・11図、図版5・6)

本址からの出土遺物は、第10、11図にかけたものの外に、覆土中から土師器破片82片、須恵器破片4片、内耳破片1片が出土したが器形復原の出来ないものである。

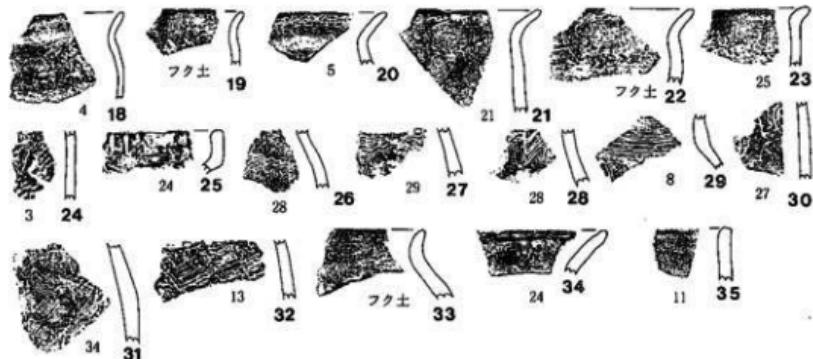
1は、土師器カメ、口径20cm、器高36.6cm、底部9.6cmでカマド内にはほぼ完形の形で南北に横たわって出土した。器の上半分は表面内面共にロクロ使用の細い線が頗著にあらわれ、下部には輪積の痕が残され、胎土は長石が多く入り焼成は良好で、器肉の厚さも薄く0.6~0.7cm位である。表面には、ところどころに粘土混じりのおこげが付着している。底は、糸切痕。全体的には火を受け赤色を呈し、胴の一部に黒く煤が付着している。2は、土師器カメで、口径18cm、底8.5cm、器高38.9cmでカマド入口付近より半分に割れた形で出土した。復原後殆ど完形に近いものとなった。器面は凸凹していくで調整悪く粗成のもので、粘土分を含んだおこげが部分的に残存し、仕上げ時の櫛状器具によるカキ目も付着した煤の間にところどころ残存している口縁内側にもカキ目痕が残る。底は木葉痕



第10図 第2号居住址遺物実測図

1~9、1:6

10~17、1:3



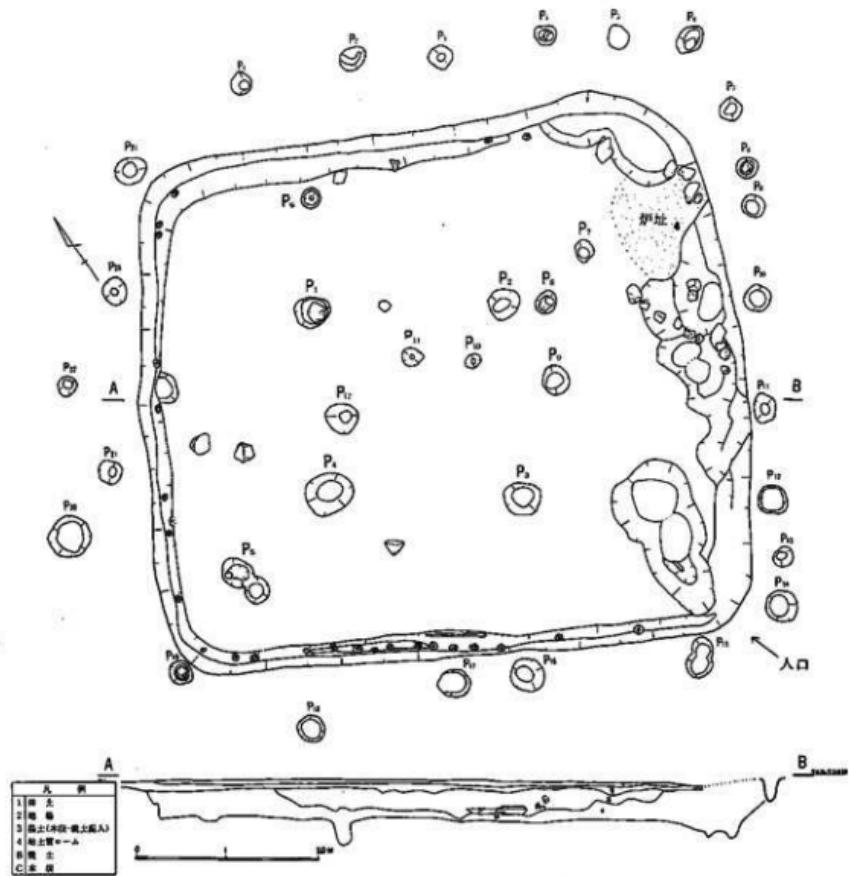
第11図 第2号住居址出土土器拓影 (1 : 3)

である。又表面の縦半分は煤で黒く、反対の面は焼けて赤くなっている。器内は、きれいで汚れも認められない。

3は、土師器カメで、本器の破片は大多数がカマド内から出土したが、少数の破片は床面全体に散在し、接合の結果では五ヶ所に及んでおり、約6割程の原形復原が可能となった。口径32.5cm、器高40.3cm、底の径17.7cmを測る。器面は、粗成らしく起伏が多く、上部約10cmは擦れていてざらざらの肌であるが、下部にはカキ目が薄く残存し、又口縁部の外面内面共にロクロ調整と思われる線状の痕が表れている。底部は大部分欠損で僅かしか残存していないが、木葉痕であると思われる。

4、5、6は、土師器鉢の底部に属する部分で、底は共に木葉痕である。4の器面には細いカキ目が、縦横に施され、表面は煤で黒い。5は、器面が比較的きれいで、櫛状器具によるカキ目が、器の底から上に向かって施され、調整の方法などを知ることが出来る。以上の土師器の推定出来る時代決定について、その形式編年から見れば、2を代表して、真間末期から平安初期の国分期即ち9世紀頃と思われる。

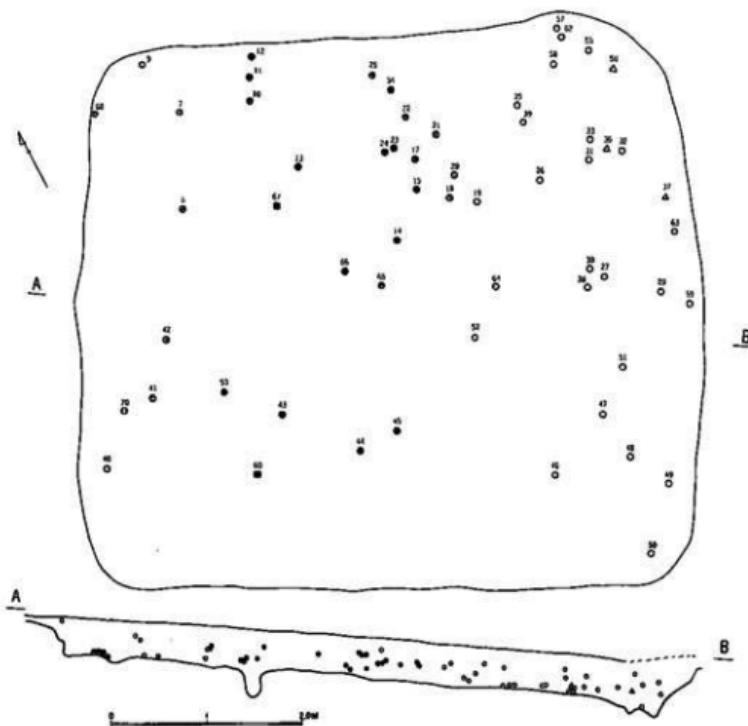
10は、須恵器長頸瓶の頸部で、口径8.4cm、頸の長さ9.2cm、器肉の厚さは0.5cm～0.7cmで、ロクロ調整されている。内側には自然釉がかかっておる。形式編年からK-78に平行されるものと思われる。11は、須恵器小瓶、口径10cm、器高4.6cm、底は、糸切ツケ高台窓調整で、5.8cmあり、口縁と底の比は、口径の1/2より底の方が0.8cm大きい。形式から見れば平安初期国分II期に平行されよう。12は、須恵器の蓋の口縁部。13は、須恵器の皿、底は糸切痕。14は、鉄鎌の一部で先が欠損したものと思われる。15は、刀子。16は、鉄滓。17は、カメ形土器の胴部で叩目。18～23は、土師器口縁破片。24は、縄文土器破片。25～34は、座光寺原式に比定される土器片。25、33、34は、弥生式土器の口縁部。35は、内耳鍋の口縁部。24～35までの遺物は本址には関係なく、恐らく洪水等によつて流れ込んだものと考えられる。



第12図 第3号住居址実測図

第3号住居址（第12図、図版7）

本住居址は、G-9区画内に発見された住居址である。この住居址の検出面は、水田の耕土を重機で除土した直下から発見された遺構である。規模は東西6.6m、南北5.6m。壁周辺22個の壁外柱穴が存在する隅丸方形の竪穴式住居址で、住居内には主柱穴P1～P4が配され高窓を有する入母屋式の住居と考えられる住居である。カマドは北東の壁に作られていたが、水田造成時に破壊されたものか焼土と焼石が付近に散在している。カマドの南側に凹地があり灰や木炭が充満していた。東南の隅は出入口と見えて段状になっていて、左右に柱穴があるのは、おそらく住居の出入口であろう。床面には焼土や木炭が多く検出されたのはこの住居は火災にあったものであろう。（早川）



第13図 第3号住居址遺物分布図

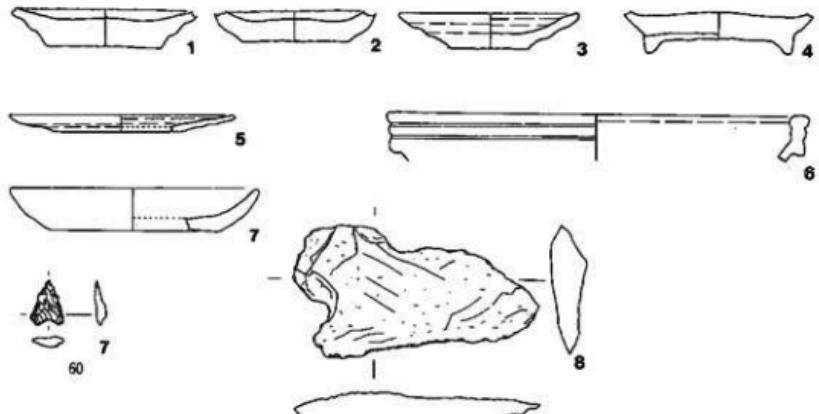
#### 遺物（第14図、第2表、図版8）

第3号住居址の遺物は140点余りであるが土師器の出土が最も多い。中には、縄文、弥生土器かと思われるものもあるが、無文で時期は定かではない。本址における出土遺物は接合され完形となるものがひとつもない。住居址の中においては、北側にかたよって出土がみられた。

石器は、敲打器2、焼石4、すり石1、石鋸1、黒曜石の剥石1、横刃形石器1が出土した。焼石はカマドの位置と考えられる住居址の北東部から出土した。

| 層    | レベル   | 基                          | 編                     | N <sub>1</sub> | 層     | 基      | 編      | N <sub>2</sub> | 層     | 基      | 編 | 層 | 基 |
|------|-------|----------------------------|-----------------------|----------------|-------|--------|--------|----------------|-------|--------|---|---|---|
| 6-1  | 160.5 | 深<br>水<br>平<br>安           | 汽<br>土<br>師           | 35             | 164.5 | 燒<br>土 | 器<br>器 | 36             | -4    | 火<br>焰 | 器 | * | * |
| 7-2  | 148   |                            |                       | 37             | 162   | 器      | 器      |                | -5    | 陶<br>器 | 器 | * | * |
| -3   | "     |                            |                       | 38             | 152   | 器      | 器      |                | -7    | 陶<br>器 | 器 | * | * |
| -4   | "     |                            |                       | 39             | 146   | 器      | 器      |                | -9    | 陶<br>器 | 器 | * | * |
| -5   | "     |                            |                       | 40-1           | 163   | 土      | 器      |                | -10   | 陶<br>器 | 器 | * | * |
| -6   | "     |                            |                       | 41-1           | 163   | 土      | 器      |                | -11   | 陶<br>器 | 器 | * | * |
| -7   | "     |                            |                       | -3             | "     |        |        |                | -12   | 陶<br>器 | 器 | * | * |
| 9-1  | 163   | 着<br>文<br>中<br>國<br>西<br>周 | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | 42             | 155.5 | 燒<br>土 | 器      | 43             | -14   | 陶<br>器 | 器 | * | * |
| 10-1 | 147   | 着<br>文<br>中<br>國<br>西<br>周 | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | 43-1           | 155.5 | 燒<br>土 | 器      | -2             | 170   | 陶<br>器 | 器 | * | * |
| -2   | "     |                            |                       | -2             | "     | 土      | 器      | 43             | 165   | 陶<br>器 | 器 | * | * |
| -3   | "     |                            |                       | -3             | "     | 土      | 器      | -1             | 170   | 陶<br>器 | 器 | * | * |
| -4   | "     |                            |                       | -4             | "     | 土      | 器      | -2             | 165   | 陶<br>器 | 器 | * | * |
| 11-1 | 147.5 | 鐵<br>土                     | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | 44-1           | 156   | 土      | 器      | -3             | 170   | 陶<br>器 | 器 | * | * |
| -2   | "     |                            |                       | -2             | "     | 土      | 器      | -4             | 165   | 陶<br>器 | 器 | * | * |
| 12-1 | 151   | 鐵<br>土                     | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | -3             | "     | 土      | 器      | -5             | 170   | 陶<br>器 | 器 | * | * |
| -2   | "     |                            |                       | 45             | "     | 土      | 器      | 46-1           | 164.5 | 土      | 土 | * | * |
| 13   | 142.5 | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | -2             | "     | 土      | 器      | 47             | 164.5 | 土      | 土 | * | * |
| 14-1 | 158   | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | -3             | "     | 土      | 器      | 48-1           | 151   | 土      | 土 | * | * |
| -2   | "     |                            |                       | -4             | "     | 土      | 器      | -2             | 168   | 土      | 土 | * | * |
| -3   | "     |                            |                       | -5             | "     | 土      | 器      | -3             | 166   | 土      | 土 | * | * |
| -4   | "     |                            |                       | 49             | "     | 土      | 器      | -4             | 160.5 | 土      | 土 | * | * |
| -5   | "     |                            |                       | -5             | "     | 土      | 器      | -5             | 173   | 土      | 土 | * | * |
| -6   | "     |                            |                       | 50             | "     | 土      | 器      | 51-1           | 178.5 | 土      | 土 | * | * |
| -7   | "     |                            |                       | -2             | "     | 土      | 器      | -2             | 178.5 | 土      | 土 | * | * |
| 15-1 | 147   | 生<br>土                     | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | -3             | "     | 土      | 器      | -3             | 178.5 | 土      | 土 | * | * |
| -2   | "     |                            |                       | -4             | "     | 土      | 器      | -4             | 178.5 | 土      | 土 | * | * |
| 17   | 154   | 生<br>土                     | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | -5             | "     | 土      | 器      | 52-1           | 162   | 土      | 土 | * | * |
| 18-1 | 148   | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | -6             | "     | 土      | 器      | -2             | 139.5 | 土      | 土 | * | * |
| -2   | "     |                            |                       | -7             | "     | 土      | 器      | -3             | 139.5 | 土      | 土 | * | * |
| 19   | 151.5 | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | 49-1           | 153.5 | 土      | 器      | 53             | 148   | 土      | 土 | * | * |
| 20   | 151.5 | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | -2             | "     | 土      | 器      | -2             | 148   | 土      | 土 | * | * |
| 21   | 151.5 | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | -3             | "     | 土      | 器      | -3             | 159   | 土      | 土 | * | * |
| 22   | 144.5 | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | 50             | "     | 土      | 器      | 51-1           | 164   | 土      | 土 | * | * |
| 23   | 144   | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | -2             | "     | 土      | 器      | -2             | 164   | 土      | 土 | * | * |
| 24-1 | 143.5 | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | -3             | "     | 土      | 器      | -3             | 161   | 土      | 土 | * | * |
| -2   | "     |                            |                       | -4             | "     | 土      | 器      | -4             | 161   | 土      | 土 | * | * |
| 25   | 161.5 | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | 52-1           | 148   | 土      | 器      | 53             | 165   | 土      | 土 | * | * |
| 26   | 146.5 | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | -2             | "     | 土      | 器      | -2             | 165   | 土      | 土 | * | * |
| 27   | 161   | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | -3             | "     | 土      | 器      | -3             | 165   | 土      | 土 | * | * |
| 29   | 146   | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | 53             | "     | 土      | 器      | 54             | 165   | 土      | 土 | * | * |
| 30   | 144   | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | -4             | "     | 土      | 器      | 55-1           | 161.5 | 土      | 土 | * | * |
| 31-1 | 146   | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | 55             | "     | 土      | 器      | -2             | 161.5 | 土      | 土 | * | * |
| -2   | "     |                            |                       | -3             | "     | 土      | 器      | -3             | 161.5 | 土      | 土 | * | * |
| 32   | 160   | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | 56             | "     | 土      | 器      | 57             | 165   | 土      | 土 | * | * |
| 33   | 148.5 | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | 57             | "     | 土      | 器      | 58             | 165   | 土      | 土 | * | * |
| 35   | 155   | 土                          | 器<br>器<br>器<br>器<br>器 | 58             | "     | 土      | 器      | 59             | 165   | 土      | 土 | * | * |

第2表 第3号住居址遺物一覧表(最高標高 746.569m)



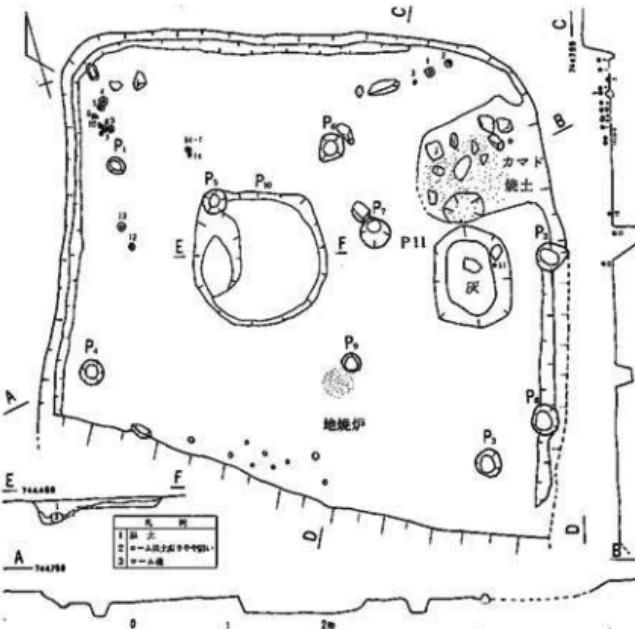
第14図 第3号住居址遺物実測図

#### 第4号住居址

(第14図)

遺構

本址は、堀1号の調査の為に堀の西側ヘトレントチを開けた際に地下約1m下、グリッドH-8に床面を検出、之を重機によつて更に拡張し発見された竪穴式住居址である。本址の南側が一部破壊されているのは、すぐ南側には現在、瀬沢川が流れ、その源流は蟹沢と



第14図 第4号住居址実測図及び遺物分布図

呼ばれる沢で、その氾濫の歴史は地層調査でも明らかな如く、付近一帯は何回となく大洪水に見舞われていることから、開墾とか言う事で人工的に大きな土手を崩し、之を破壊したものでなく、災害により決壊されたものと考えられる。

前述したこの様な事が真実であるか否かはさだかでないが、本址のプラン確認に当たり、北側約半分を除いては困難であった。本址の推定出来る規模は、東西約5.2m前後、南北5.5m前後のはば隅丸方形であると思われる。壁は、北側が高く27cm~17cm残存し、南側は床面のみで切られ壁は無く、東側西側共に中央部で10cm前後である。床面は、約10cm位の起伏はあっても平均にほぼ平らで、良好なタタキになっている。周溝は、北側で約18cm前後、東側で10cm~3cm、西側で約6cm~2cm程度認められた。ピットは、1~11で、主柱穴はP1、P2、P3、P4が考えられ、P5、P6、P7、P9は間柱的なものと考えられるが、P8は、補助的なものに該当するものと思われる。P

| ピットNo | 規<br>大きさ | 標<br>高さ<br>cm | 備<br>考 | ピットNo | 規<br>大きさ | 標<br>高さ<br>cm | 備<br>考 |
|-------|----------|---------------|--------|-------|----------|---------------|--------|
| P1    | 20×16    | -23           | 主柱穴    | P7    | 26×24    | -28           |        |
| P2    | 28×29    | -29           | #      | P8    | 30×28    | -29           | 間柱     |
| P3    | 27×26    | -17.5         | #      | P9    | 20×18    | -16           | 補助柱    |
| P4    | 25×26    | -20           | #      | P10   | 140×135  | -13~-26       | 間柱     |
| P5    | 24×24    | -48           | 間柱     | P11   | 80×107   | -18.5         | 土 塵    |
| P6    | 25×27    | -22           | #      |       |          |               | 灰 売    |

第3表 第4号住ビット規模別一覧表

| 出 土<br>No. | 図 版<br>No. | 器 種    | レベル<br>最高標高<br>746.569 | 欠損の<br>有無 | 規 模 cm |     |      | 底 部        | 焼 成 | 備 考   |
|------------|------------|--------|------------------------|-----------|--------|-----|------|------------|-----|-------|
|            |            |        |                        |           | 口径の径   | 高さ  | 底の径  |            |     |       |
| 1          | 15         | 灰釉輪花碗  | 208.5                  | 有         | 17.0   | 5.7 | 7.5  | 糸切フケ高台ヘラ付上 | 良   |       |
| 2          | 12         | 土師質皿   | 206.5                  | 不         | 不明     | 不明  | 6.6  | 糸 切        | 不   | 赤 色   |
| 3          | 13         | 同      | 220.0                  | 不         | 不      | 不   | 6.0  | 不          | 軟か  | 赤 色   |
| 4          | 1          | 台付糸切高杯 | 208.0                  | 完形        | 9.6    | 3.1 | 4.8  | 糸切台付高台     | 良   | 白っぽい  |
| 5          | 3          | 同 杯    | 不                      | 不         | 9.6    | 2.5 | 3.9  | 糸 切        | 良   | 朱 色   |
| 6          | 5          | 同 杯    | 不                      | 不         | 10.3   | 2.6 | 4.7  | 不          | 良   | 赤 色   |
| 7          | 6          | 同 盆    | 不                      | 有         | 10.9   | 2.7 | 4.6  | 不          | 軟か  | ダイダイ色 |
| 8          | 4          | 同 杯    | 不                      | 完形        | 8.9    | 2.7 | 3.5  | 不          | 良   | 朱 色   |
| 9          | 2          | 台付糸切高杯 | 不                      | 不         | 9.4    | 3.3 | 4.3  | 不          | 良   | ダイダイ色 |
| 10         | 8          | 同 小 盆  | 不                      | 不         | 7.9    | 2.9 | 5.1  | 糸切台付高台     | 良   | 半分朱色  |
| 11         | 14         | 同 壁の底部 | 不                      | 有         | 不明     | 不明  | 10.6 | 糸 切        | 良   | 焼けて赤い |
| 12         | 7          | 同 小 盆  | 221.0                  | 不         | 不      | 不   | 3.9  | 不          | 良   | 赤 い   |
| 13         | 9          | 同 小 杯  | 214.0                  | 不         | 8.8    | 2.3 | 3.9  | 不          | 良   | やや黒い  |
| 14         | 11         | 同 杯    | 212.0                  | 不         | 10.4   | 2.5 | 4.2  | 不          | 軟か  | 赤 い   |
| 14-1       | 10         | 同 杯    | 不                      | 不         | 9.1    | 1.8 | 4.0  | 不          | 良   | 不     |
| フク土        | 16         | 灰釉陶器 盆 | フク土                    | 不         | 不明     | 不明  | 5.2  | ツケ高台       | 良   | 美濃陶器  |

第4表 第4号住居址出土土器一覧表

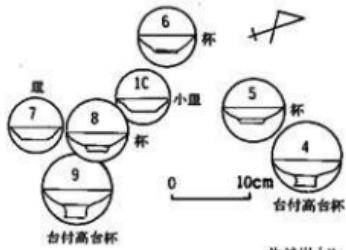
10は、土坑で浅いところで13cm、一部深い處で26cmあり黒土で埋まっていたが、覆土中には遺物は検出されなかった。本土坑は上部に貼床もないで、本址に属するものか否かは不明である。P11は、灰で埋まっている為灰溜ではないかと思われる。出土した遺物は、No.11の變形土器の底部で焼けて赤くなっていた。

カマドは、本址の北東隅よりやや南寄りに築造されたが、殆ど破壊され、焼土中に10cm~20cm大的石が残存したのみで、カマドの型態は不明である。又南側中央やや北寄りに床面が赤く焼けていた。規模は約30×30cmある。(小木曾)

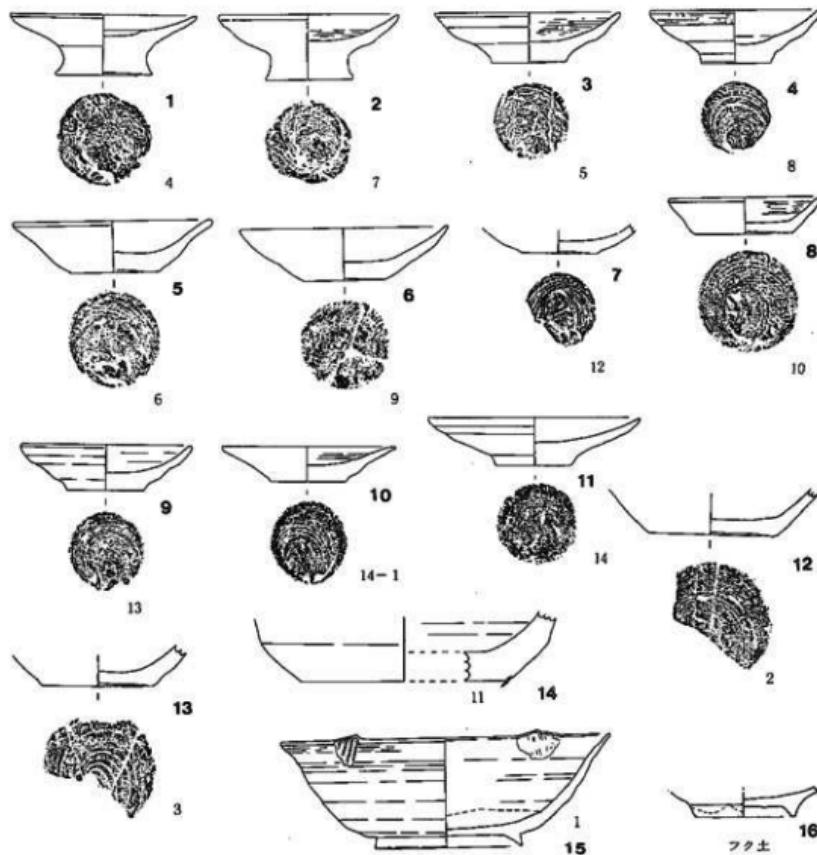
#### 遺物 (第15・16図、第2表、図版9・10)

本址の出土遺物は、極く少量で、第16図の外覆土中の遺物は、土器破片11片、内黒破片1片のみであった。完形6個、復原されたもの4個である。

1、2は、土師質台付糸切高台とも言われ出土例が比較的少ない地方的な色彩の濃いもので、最近の出土例として駒ヶ根市反目遺跡から同形の杯が出土し注目され、調査結果に於いては11世紀頃とされ、主として、



第16図 第4号住居址土器出土状況配置図

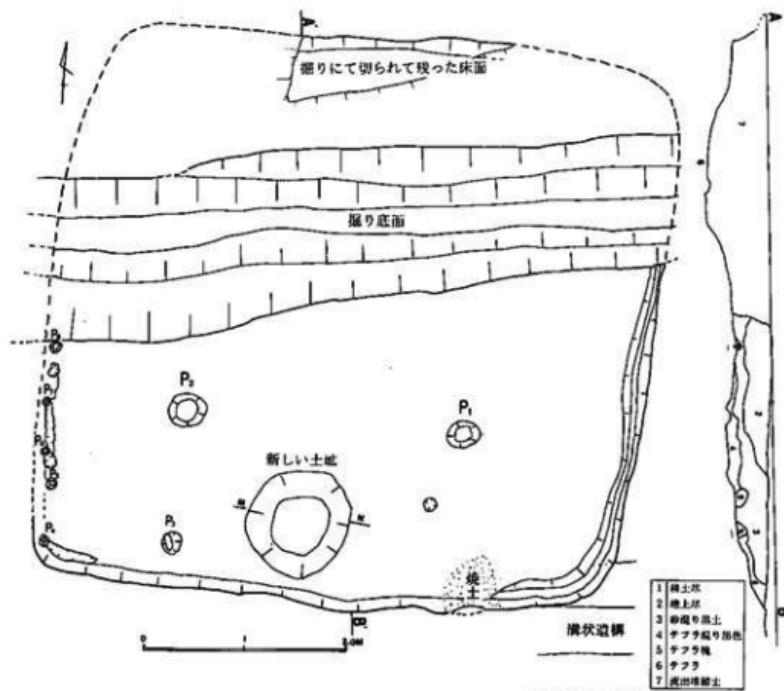


第17図 第4号住居址出土土器実測図 (1:3)

祭器として使用したものと言われている。本器は、それに該当するものと考えられるが尚研究の余地があると考えられる。3～5、9～11は、土師質杯、底は糸切。6～8、12、13は、土師質皿で糸切底。14は、カメの底部。15は、輪花碗、折戸53、百代寺窯の4～5期の11世紀末に平行するもの。16、美濃灰釉陶器の底部、フク土より出土。大窯期の15世紀と推定できる。

尚、住居の北西の隅より出土した4～10の7個の土師器について考察するに、偶然にも全器が伏せた状態で出土し、全く動いていないとすれば、器の配置から見てどんな結論が生まれるか今後の研究を待つとしても、5、8、10の器には酸化鉄とも焼けたともない、朱の色らしきものが塗られているかに見えるのは恐らく祭記に用いられた事を更に色濃くするものである。

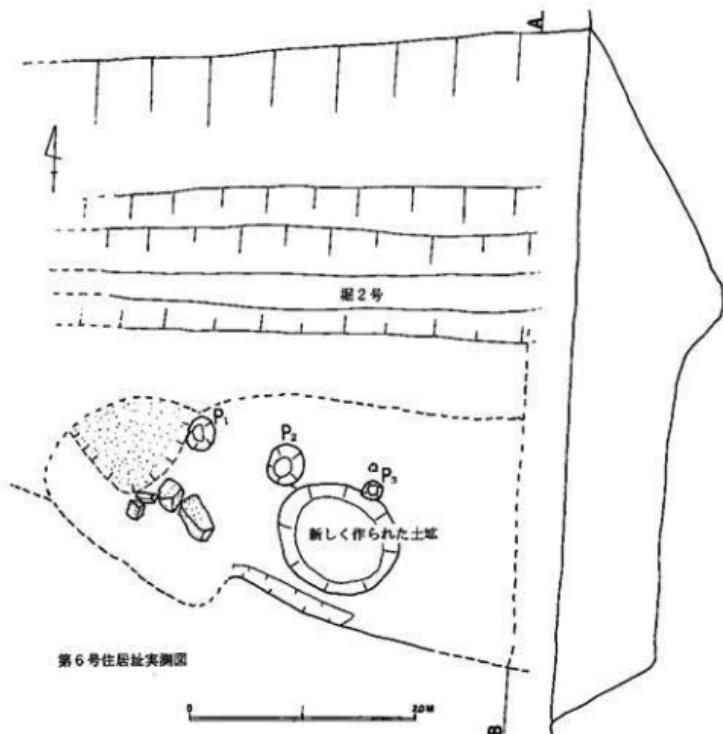
以上の事から本址の時代決定は、輪花碗に代表される平安時代11世紀末と思われる。



第18図 第5号住居址実測図

#### 第5号住居址（第18図、図版11）

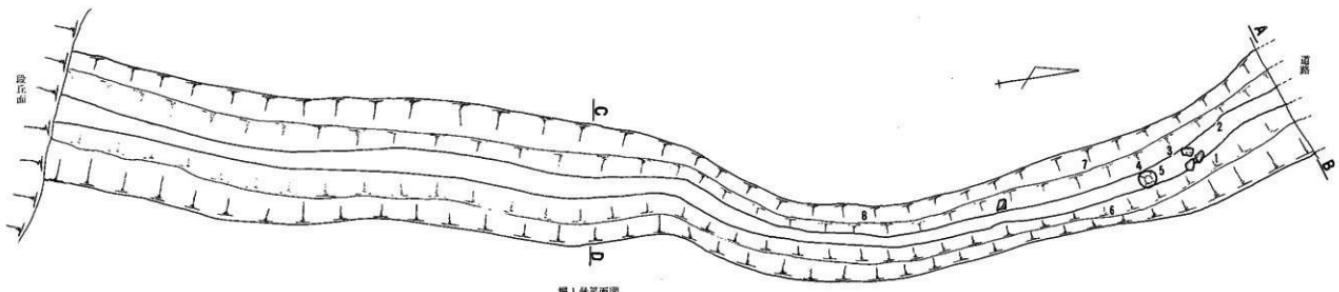
本住居址は、調査用区画のF-11内に発見された住居址である。住居址は堀2号の調査中に検出されたもので、その規模は東西6.0m南北5.70mの隅丸方形の住居址である。本址は廃絶後堀2号にて北側一部残して分断された形である。壁は東側の南半分と南側が原形を止めているが、西側は第6号住居址の壁と接していたところより壁面は不明である。壁の位置と考えられる箇所に数個の径10cm内外深さ10~6cmの小穴が認められた。また、北側にわずかではあるが、床面と、壁を確認することができたことで、この住居址のプランを知ることができた。柱穴はP1・P2が認められたが、他の柱穴は堀で削り取られたものと考えられる。柱穴間は2.25m、柱穴の規模は長径35~38cmの梢円直穴深さ51cmを測る。焼土は南東壁に接して認められたが、炉址とは考えられない。また、東側壁に接して木炭の集中している所が検出されたが炉址とは認めがたいものである。P1とP2との中間南側に発見された遺構は、径1.05m内外、深さ48cmの土塗である。この土塗は本址よりも後で作られたものようである。本址は平安時代の遺構である。（友野）



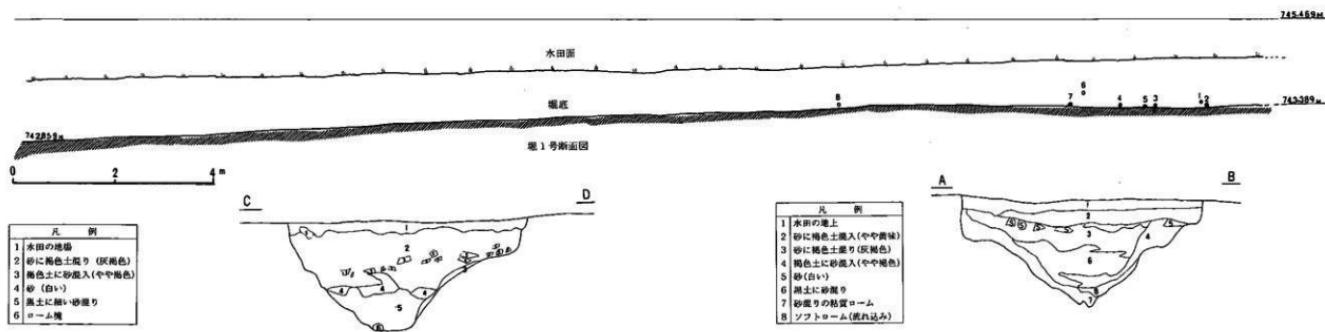
第19図 第6号住居址実測図

#### 第6号住居址（第19図、図版11）

本址はFG-9・10の調査区内に発見された遺構である。この住居址は住居の四分の一ほどが検出されたのみで、他は堀で破壊されてしまったものである。壁はP3の南にわずかに認められたが、他はほとんど破壊されてしまった。主柱穴はP2と考えられるが他は不明である。P3の西に焼土があり石が焼けている所が認められたが、炉址と断定するまでには至らなかった。本址は平安時代の住居址である。（友野）



堤 1 号平面図



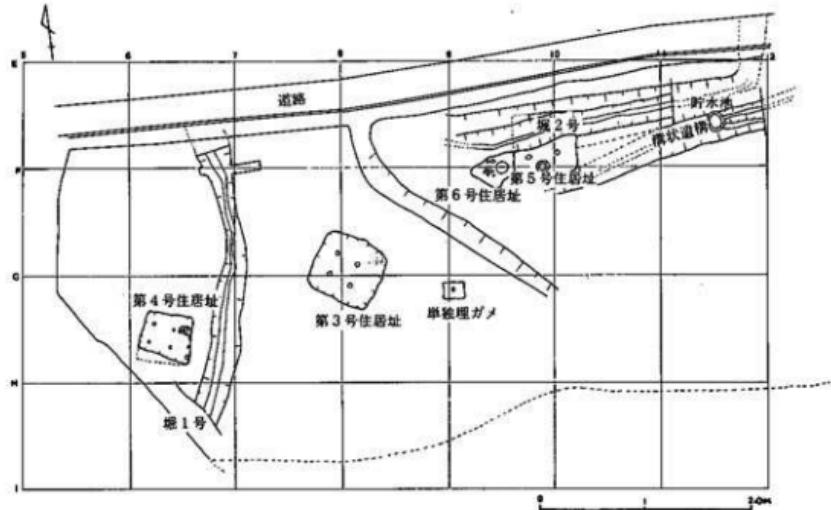
第20図 堤 1 号実測図



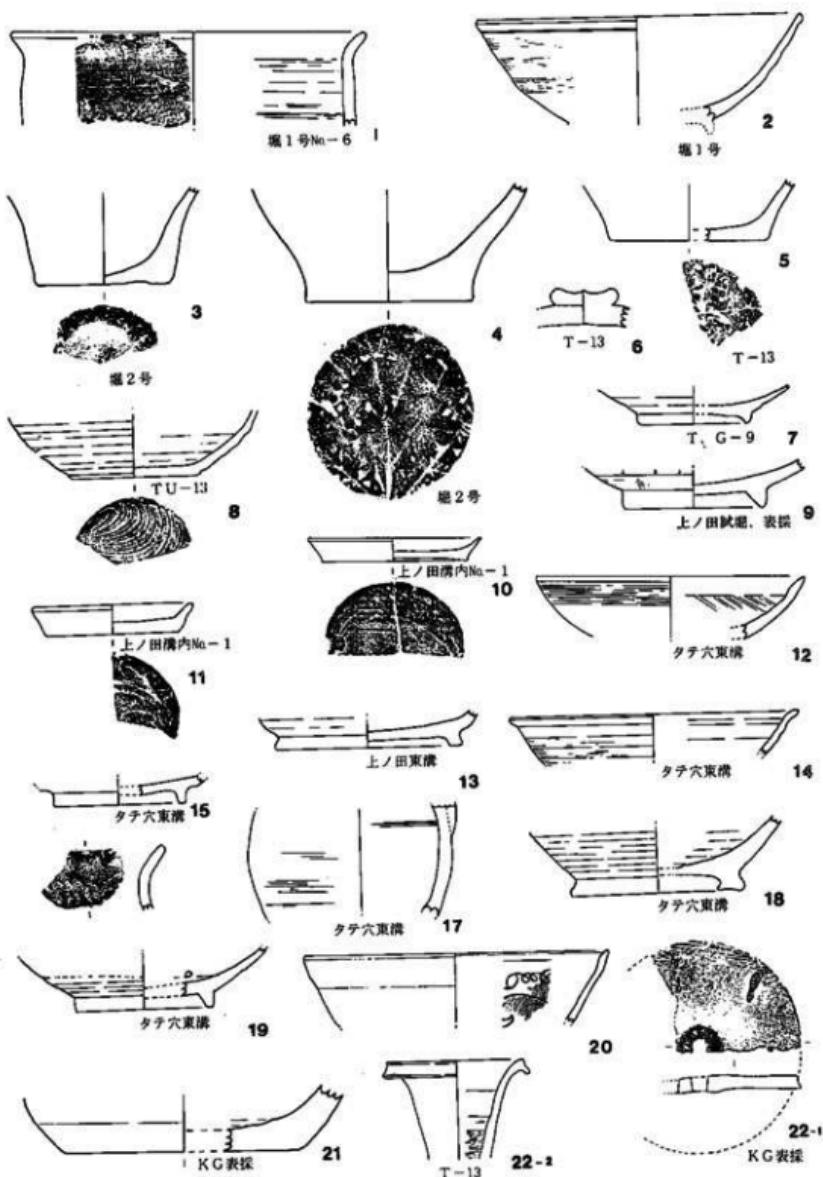
堀1号 (第20図、図版13)

堀1号は、E～Gの6・7グリッドに発見された遺構である。この堀は現水田地場下面に検出されたものであるため、堀が作られた当時の面を知るよしもないが、北側の畑地面はあまり変わっていないようであるので、この面を基準とすると、現地表面より50～1.0mぐらいと推測される。

今回発見された堀は、北側道跡端より南段丘まで長さ24.5mを計る。堀の上面幅測定位置でA-B地点2.4m、C-D点では2.4m、堀の最大幅は2.65m、最少幅は1.5m。深さはA-B地点で1.05m東堀端では2.50m、この比高は24cm、勾配2度を計る。堀は砂質テフラに掘り込まれて作られている。この堀も廃絶後6～7回にわたって埋めしたものである。遺物は図面に示されている位置に発見された。いずれも流出及び落込によるものである。堀型は箱薬研である。この堀の作られた年代は中世初期頃と推定される。(友野)



第21図 鐵治垣外B地区実測図



鐵治垣外遺跡出土遺物、1・2・1号の壺、3・4・2号の壺、5・6・7・8トレンチ、の上の田試場 10・11上の  
田試場内 12・14・15・17・18・19・20タテ穴東構 13上の田東構 21-表探 22-1筋輪長鉢茎、  
22-2筋輪長鉢茎。

第22回 壺 1号 2号 その他出土遺物

### 堀1号2号その他出土遺物

1. 堀1号のカメ口縁部、器面に横ナデの整形痕がみえる土師器の破片である。
  2. 堀1号出土の灰釉碗は破片である。
  3. 堀2号出土のカメ形土器の破片は弥生後期か。
  4. 堀2号出土のカメ形土器、底部に木葉痕あり、弥生後期か。
  5. T-13は、木葉痕のある弥生後期のカメ形土器。
  6. T-13は、須恵器の宝珠9世紀頃。
  7. グリッド9の付近の表採、灰軸陶器折戸53期。
  8. F-13グリッド出土の須恵器碗、糸切底、平安時代。
  9. 堀付近の表採、灰軸陶器の碗の底部、折戸53期。
  10. 貯水池水路西水路出土、糸切底のある土師器の浅皿、平安時代末か。
  11. 上の田溝内No.1出土、糸切底のある土師器皿、平安時代末か。
  12. 竪穴東溝出土、土師器の皿、平安時代末か。
  13. 上の田の東溝出土、高台の須恵器の碗の底部、ロクロ目がのこる。平安時代か。
  14. 竪穴の東溝内出土、灰軸の碗、折戸53期。
  15. 竪穴の東溝内出土、須恵器の底部、9世紀頃か。
  16. 欠番
  17. 竪穴東溝出土、灰軸四耳甌、12世紀代か。
  18. 竪穴東溝出土、灰軸瓶の底部、平安。
  19. 竪穴東溝出土、鉄軸、高台付近カメの底部、登り窓。
  20. 竪穴東溝出土、青磁、画花文碗。13-14世紀。
  21. KG、表採、土師器のカメ底部破片。
  - 22-1. KG、表採、石製紡垂車、時期不明。
  - 22-2. T13鉄軸-長頸甌、大窓期。
  23. KG、単独埋ガメ、繩文中期後葉の深鉢形土器。
- 上の田表採、寛永通宝。

### '堀2号 (第24図、図版15・16・17)

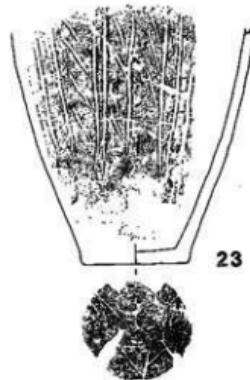
堀2号は、E～Gの9～11区画内に発見された遺構である。この堀も水田に検出されている関係で、原地表は推定するほかはない。本堀はE-9からEの11区画までの範囲28mにおよんでいた。堀の方向は東西の向に掘られた堀である。堀の断面は東よりA・B、E・F、G・Hと3ヶ所に設け実測した。その成果は実測図に示したとおりである。堀幅は上面でG・Hでは約4.7m、堀底で平均30～40cmを測る。深さは19.5mを測る。堀2号は改田のためかなり破壊されていて、不整形である。勾配は2度である。堀の形式は明らかでないが箱築研と思われるものである。

### 溝状遺構 (第24図、図版14)

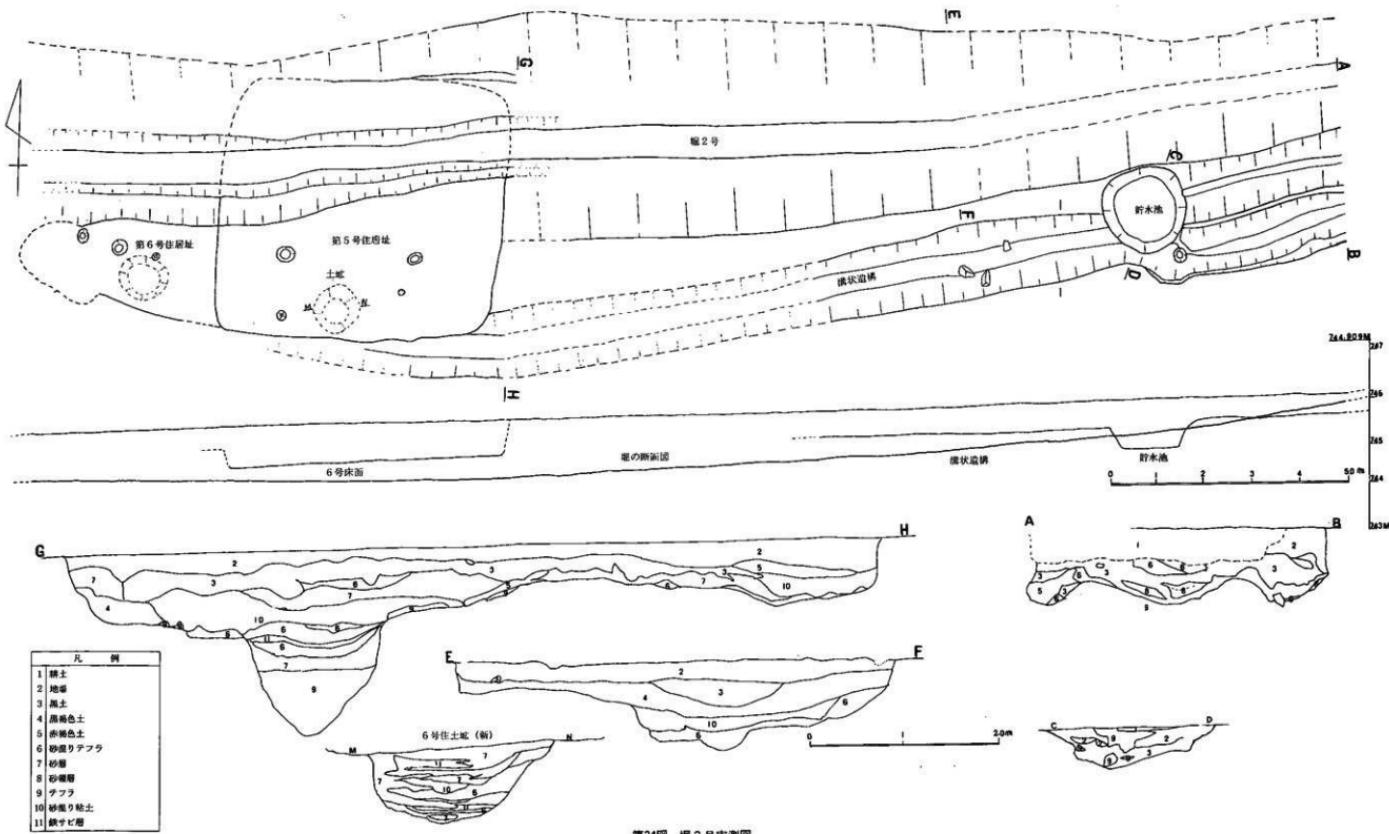
溝状遺構はE・Fの10～12区画に発見された遺構である。調査した遺構の延長は20m、溝の上面幅は北側で1m、南側溝で1mの2本である。この2本の溝がE・Fの11の中間で貯水池に合流する。それから西は上幅2.5m溝底幅50cm内外の溝となり第5号住居址の南を西側に向かって流れている。この溝状遺構の作られた年代は不明であるが、堀2号より新しく作られたものであることは確かである。

### 貯水池 (第24図、図版14)

貯水池は、Eの11区画に発見された遺構である。規模は長径1.8m、短径1.6m、深さ44cmを計る。この貯水池は2本の溝の集合の池と考えられるが、上流の状況がわからないので、この点明らかにすることはできない。(友野)



第23図 G-9 グリッド出土器実測図



第24図 堀2号実測図



## 所 見

鐵治垣外遺跡の報告に当たっては各項で詳細に述べてきたので、ここでは調査中に知り得た二、三の問題点について記し所見としたい。

1. 鐵治垣外の所在する地域は古い三峰川の扇状地の東端に当たっている地域である。この扇状地に東方の山地より流出した土砂の堆積などで、地形に変化をもたらしてきた。その後テフラの降下後にも幾度か流出が繰り返されて形成されたのが、鐵治垣外の現地形である。

2. 今回調査が実施された地域は鐵治垣外遺跡となっているが、実は南側が鐵治垣外で北側は堀之内地域である。この堀之内地籍の発掘の結果、堀が発見された。このことから、堀之内という地字に関連して古代居館跡の所在と合わせて考えてみたい。堀之内地籍には垣外という地字が多い、例えば向垣外、南垣外、鐵治垣外、千子垣外など「垣外」に囲まれているのが堀之内地籍である。そもそも、垣外というのは屋敷の外ではなく「垣」の内という意味である。例えば、豪族の領有地内ということである。以上のことから堀之内は古い土豪の居館跡地と考えられるのである。

3. 鐵治垣外遺跡は縄文中期の遺跡とされていたが、今回の調査で縄文中期、弥生後期、奈良時代、平安時代、中世にわたっての遺跡であることが確認された。

4. 春日城の南の山麓に接した水田から杉材による割板の木棚が発見された。また、その付近の畑から弥生後期の土器片も発見されていることから、弥生時代の水田が存在していたことを物語る資料として注目されるところとなった。

5. 春日城址 本址は、東松地籍と堀之内地籍にまたがっている城跡であり、春日氏の城といわれている城である。城跡は尾根状に作られた連郭式の城郭である。城の南側には何段かの帯郭が残っている。また、北側には小郭と空堀が残り、時代を物語っている。主郭の北西には小高い土塁がめぐっているあたり、戦国期の山城形式を思わせるものがある。

6. 薬師堂 堀之内の北側の小高い山麓に薬師堂がある。現在は向山俊雄氏が管理している。本尊薬師如来は螺旋が低目と衣文の切味は鎌倉時代の形式をもった室町時代の尊像である。この薬師如来は目の病に効果があるといわれ、祈願の絵馬が奉納されている。この薬師信仰は、平安時代末から鎌倉期にかけて伊那谷に入ってきた信仰である。

この度の調査で地元の向山俊雄氏他多くの方々、発掘の御指導を賜った上伊那地方事務所土地改良課の市瀬広幸氏、伊那市教育委員会社会教育課の蟹沢典人課長、矢沢巧課長補佐、早川宏主事の並々ならぬ御援助に対し心より感謝申し上げる次第であります。

調査団長 友野良一

## あとがき

本報告書の刊行は昭和63年度内を義務づけられており、調査団長、調査員の諸先生方はそれぞれ他に激務の仕事があるにもかかわらず、本報告書作成に絶大な御尽力を賜り、事務局として感謝に絶えない次第であります。

発掘の経過及び発掘の成果については本報告書中に記載されているので参考にして下さい。その中で、主たる成果を述べてみたいと思います。奈良時代整穴住居址の検出は古代手良郷の存在を意味づけ、中世館跡の発見は中世笠原庄との関連をそれぞれ探求する上で今後、多いに本報告書を活用することを願ってやまない。

各自が多忙であったので、原稿を印刷所へ送るのが、若干おくれ、報告書を期限一杯までに刊行するのが精一杯であった為に多少の不手際があったと思います。

ともあれ、ここに、本報告書刊行までには発掘調査から長い道のりがあった、本報告書を手に取つてみて、今までの苦労がひしひしと手に伝わってくる思いがします。

最後に、数々の御無理をお願いした友野良一団長、調査員諸先生に衷心より感謝の意を表する次第であります。

伊那市教育委員会  
社会教育課

## 参考文献

|            |      |                           |
|------------|------|---------------------------|
| 美濃古窯研究会    | 1976 | 「美濃の古窯」                   |
| 新人物往来社     | 1980 | 「日本城郭大系 8」                |
| 長野県        | 1981 | 「長野県史 考古資料編」              |
| 伊那市史刊行会    | 1981 | 「伊那市史 自然編」                |
| 日本考古学協会    | 1982 | 「日本考古学辞典」                 |
| 瀬戸市歴史民俗資料館 | 1982 | 「研究紀要 I」                  |
| 伊那市教育委員会   | 1983 | 鳥井田・横吹・城の腰・安岡城遺跡緊急発掘調査報告書 |
| 伊那市史刊行会    | 1984 | 「伊那市史 歴史編」                |
| 瀬戸市歴史民俗資料館 | 1984 | 「研究紀要 III」                |
| 瀬戸市歴史民俗資料館 | 1985 | 「研究紀要 IV」                 |
| 瀬戸市歴史民俗資料館 | 1986 | 「研究紀要 V」                  |

# 図 版



図版 1



1



2

1. 山の脇洞より遺跡を南へ望む

2. 遺跡より山の脇洞を望む

図版 2



1



2

1. 地質調査グリッド 0-15  
2. " 0-25

图版 3



1



3



2

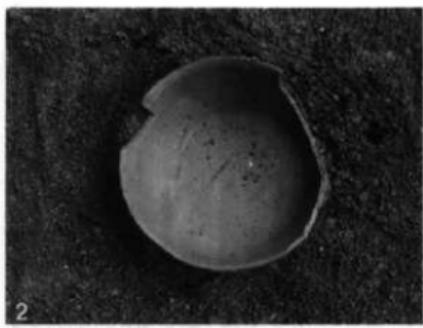


4

1~4 第1号住居址出土土器



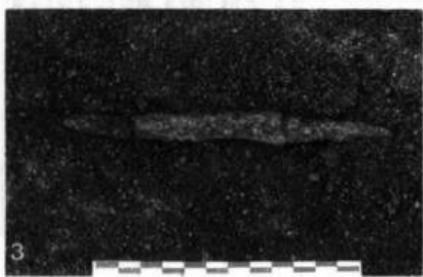
1. 第2号住居址



2



4



3



5

2~5 第2号住居址遺物出土状態

図版 5



1



3



2



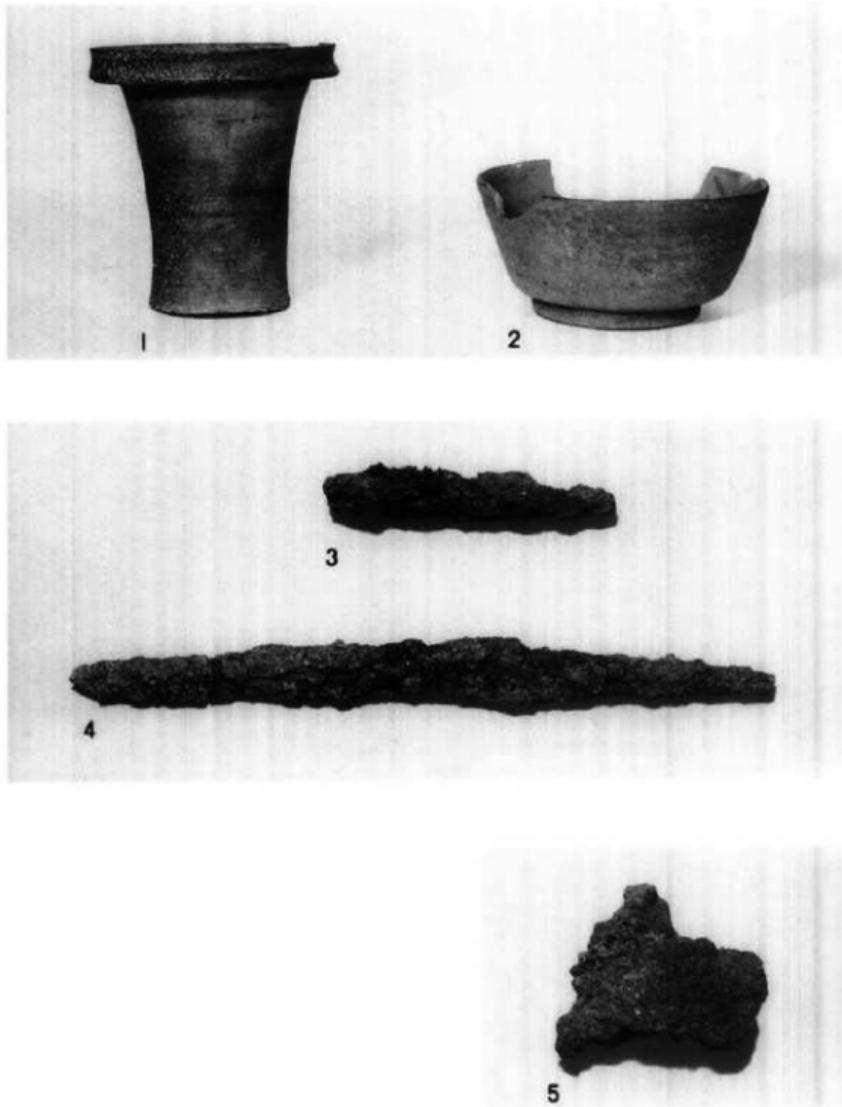
4



5

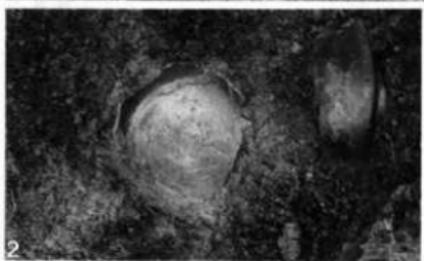
1～5 第2号住居址出土土器

图版 6

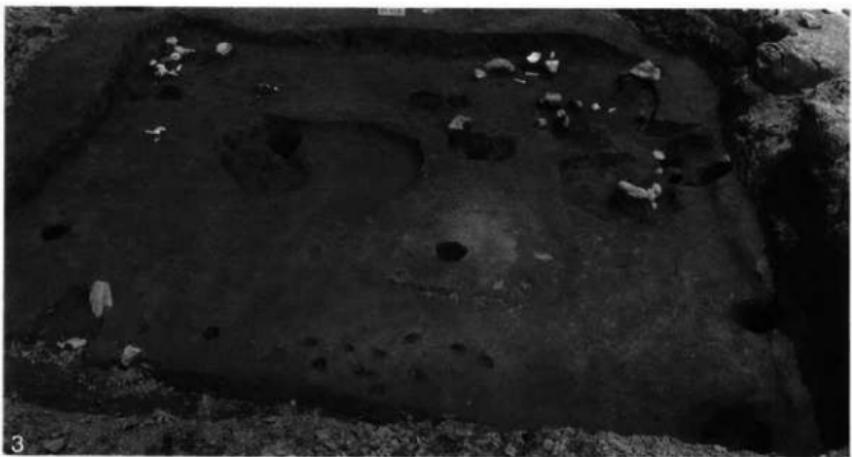


1 ~ 5 第2号住居址出土遺物

図版 7

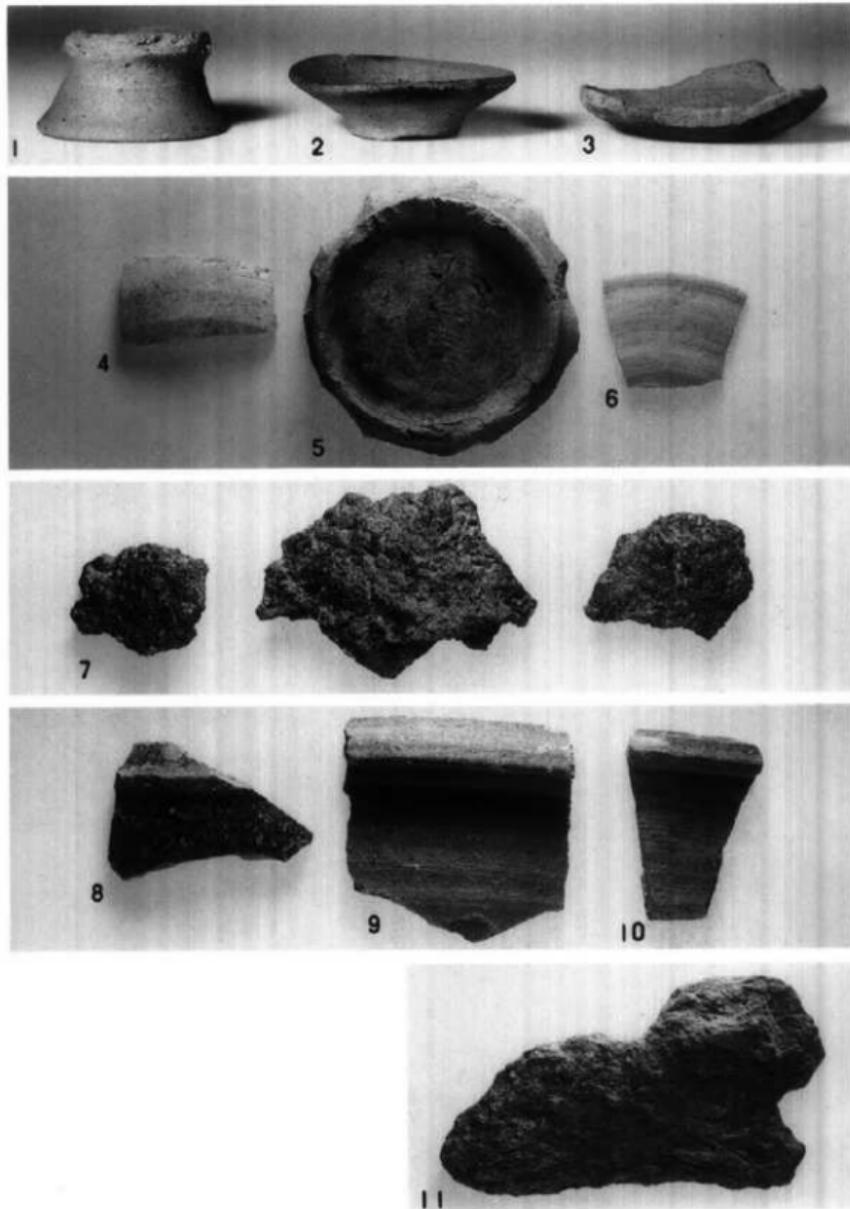


2. 第3号住居址遺物出土状態



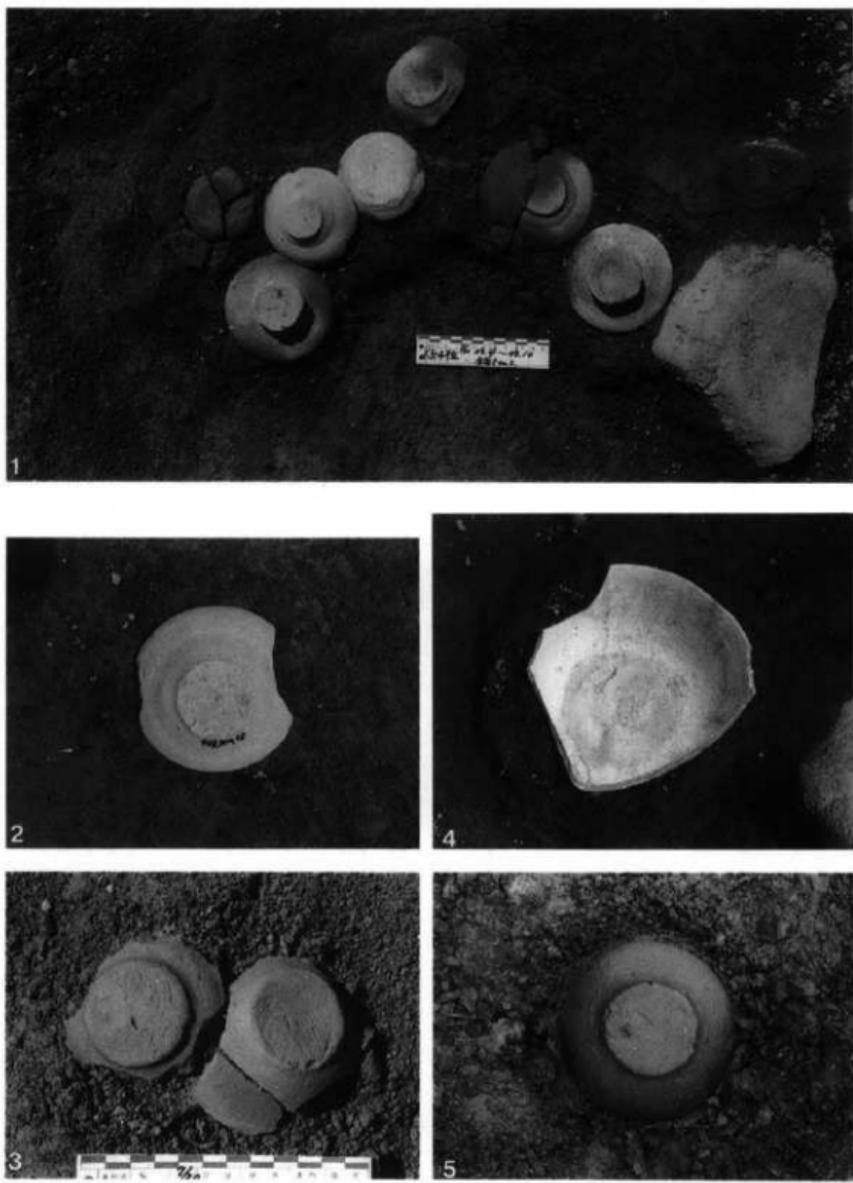
3. 第4号住居址

图版 8



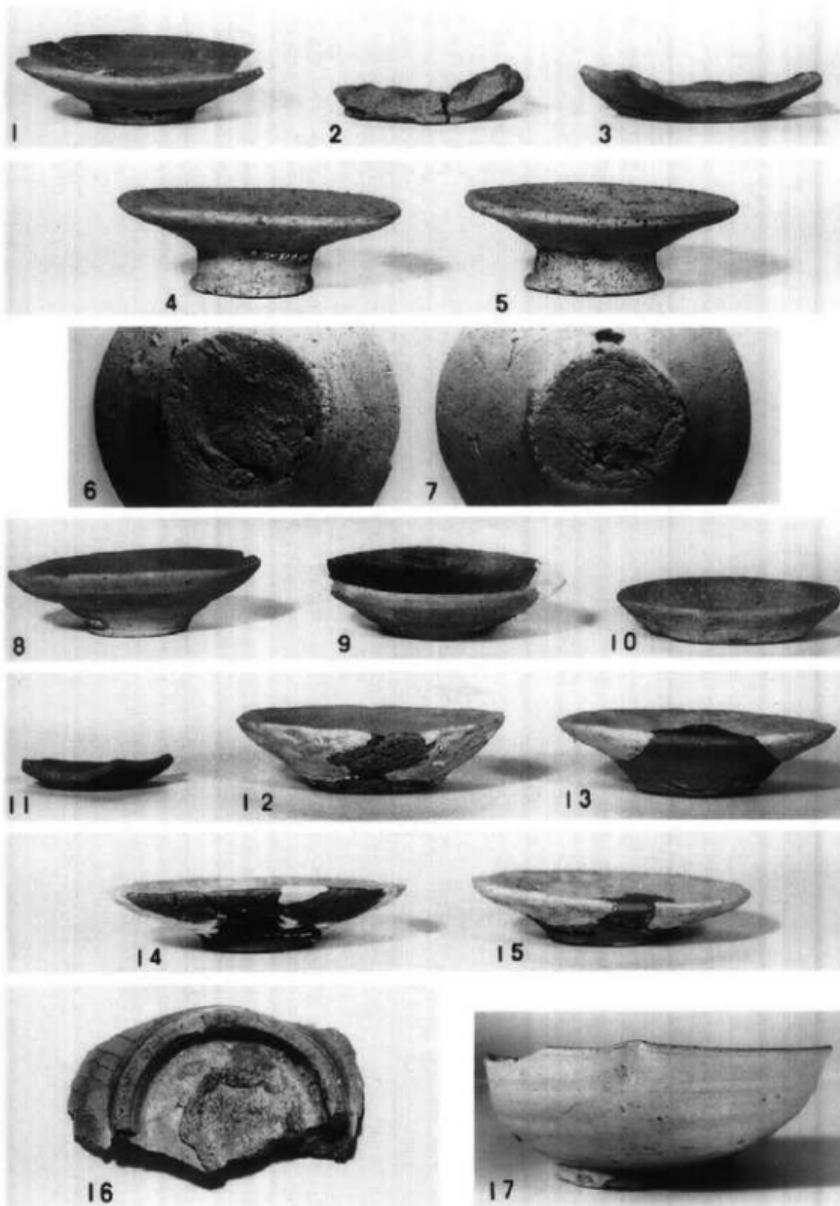
1~11 第3号住居址出土遗物

図版 9

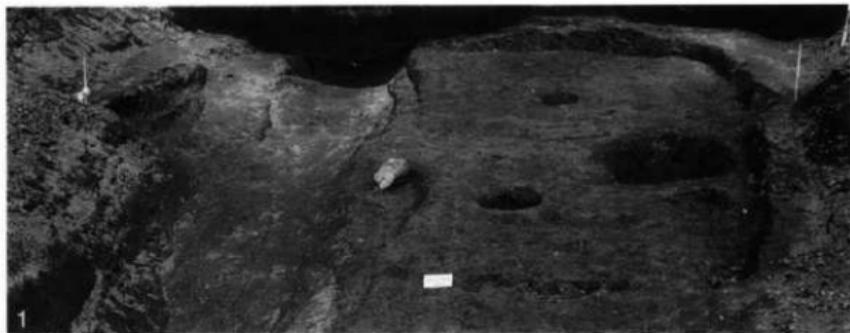


1～5 第4号住居址遺物出土状態

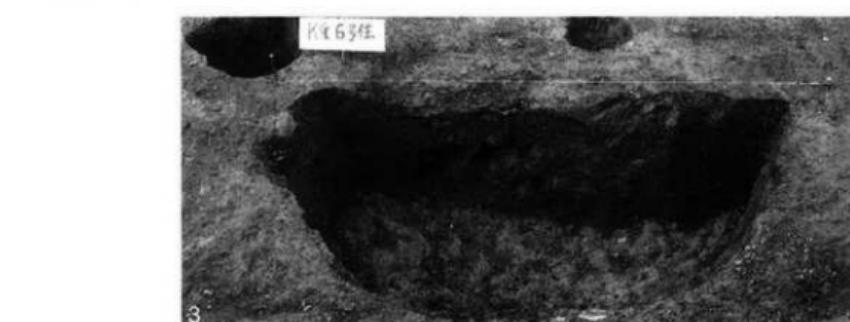
図版10



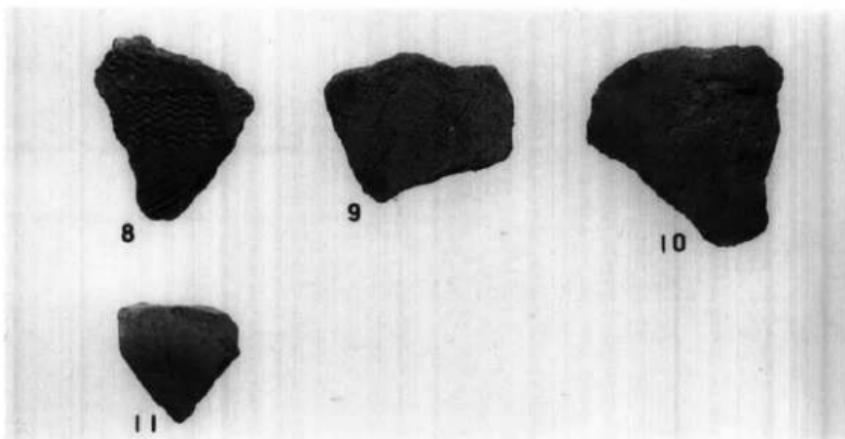
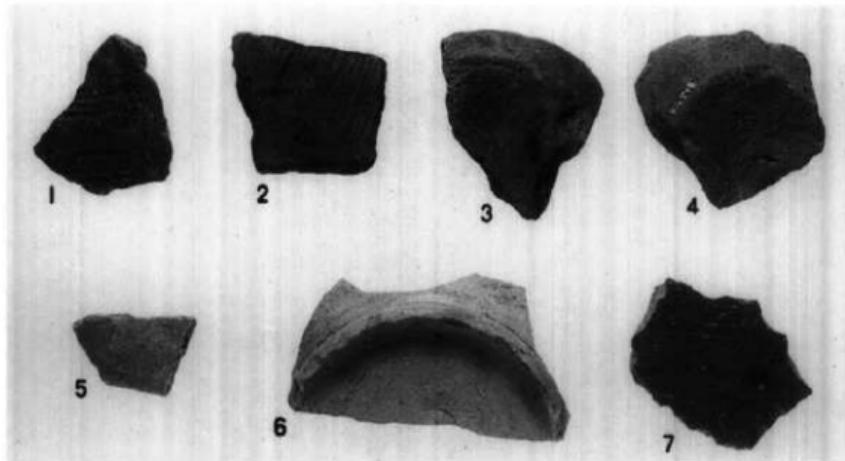
1~17 第4号住居址出土遺物



1. 第5号住居址



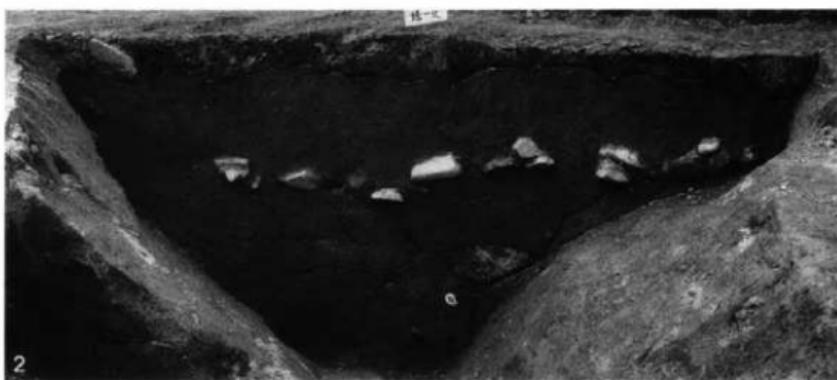
2. 3 第6号住居址



1~7 第5号住居址出土遗物

8~11 第6号住居址出土遗物

图版13



1. 堤1号 2. 堤1号北侧断面 3. 堤1号南侧断面

图版14



1



2

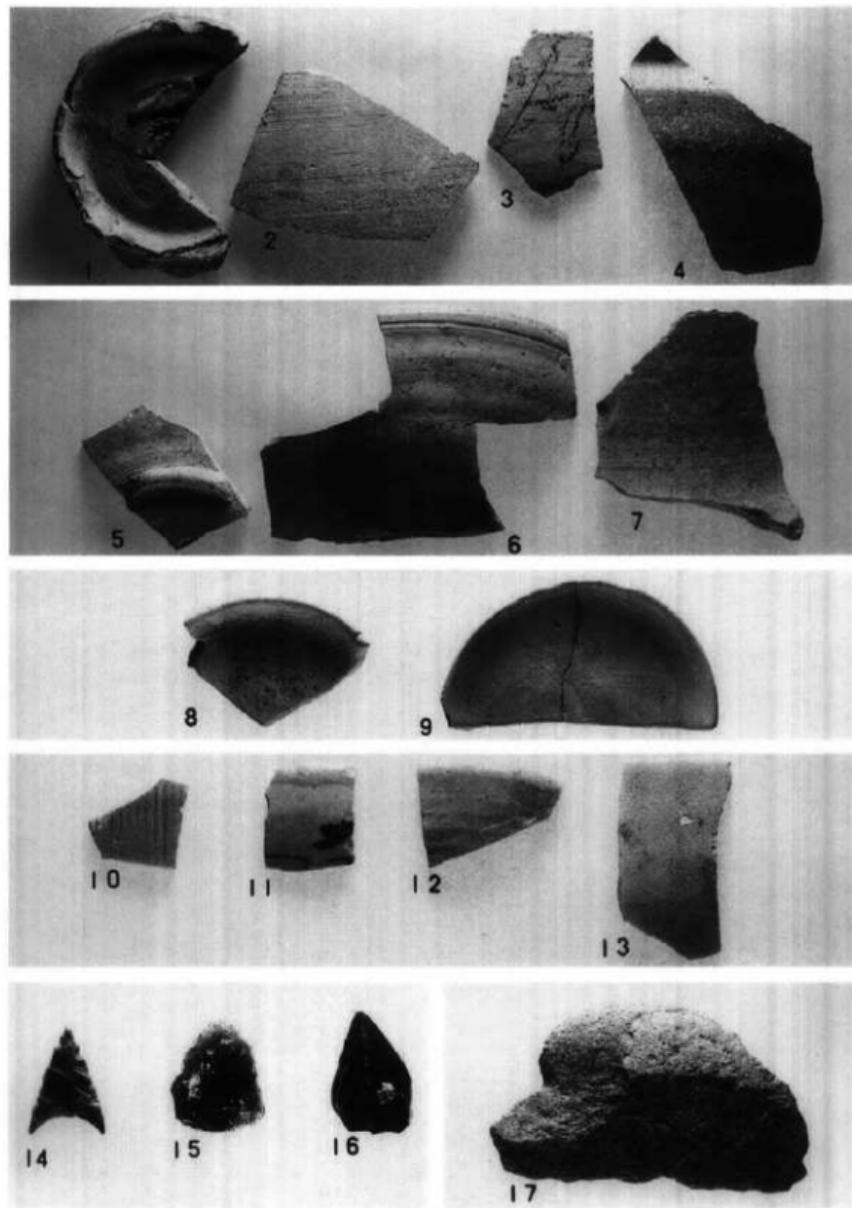
1. 满状遗構 2. 贯水池

図版15



1. 2 堀2号

図版16

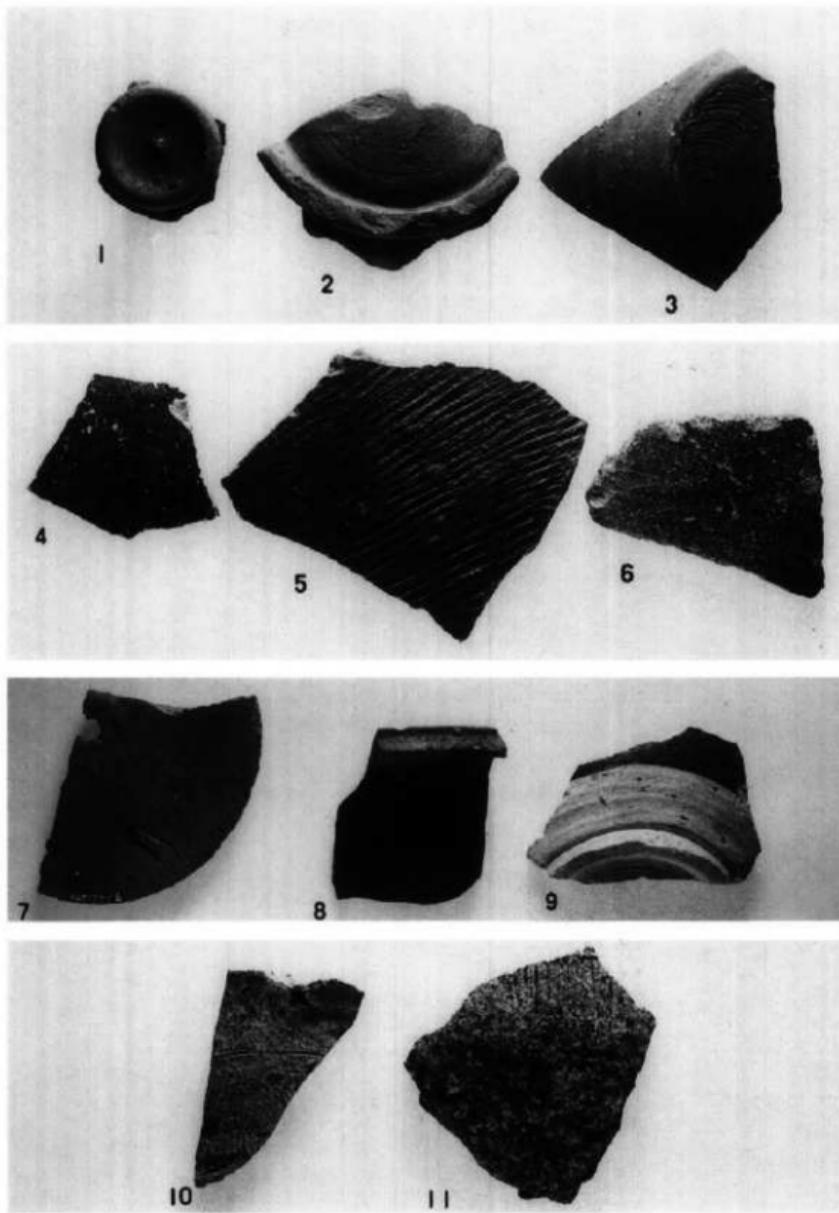


1~13 堀2号出土遺物

14. W-13グリッド出土遺物

15~17 堀2号出土遺物

図版17



1~11 坑2号出土遺物

図版18



6. 薬師堂薬師観音

1. 堀の内地区土塁跡

2. 3 向山俊雄氏宅地内土塁跡

4. 春日城址

5. 薬師堂北側石仏

図版19



遺跡を南より望む



遺跡を北より望む

図版20



1

発掘風景



2

発掘調査団のみなさん

---

---

## 鍛治垣外遺跡

—緊急発掘調査報告書—

平成元年3月 印刷

平成元年3月 発行

発行 上伊那地方事務所  
長野県伊那市教育委員会

印刷業者 小松総合印刷所

---

---

